
死神のお仕事

恢坐志津那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神のお仕事

【Nコード】

N7409F

【作者名】

恢坐志津那

【あらすじ】

死神は人を殺す…あなたは、そう思っていますか…？死神は…ただ迎えに行くだけなのです…寿命尽きた人をあの世へと……。知られざる彼らのお仕事と戦いを…あなたにお話ししよう……。…。

少女と死神

「最後だから選ばせてあげるよ。あんたは…どんな死に方をお望みかい？」

暗い路地。

二つの影が、対峙するように動いていた。

一人は、小太りの中年男性。

両手を前に突き出して、

「く、来るなあ…！」や、

「た、助けてくれえ…！」と、大声でわめいている。

もう一人は、青年。

黒いフード付きコートを被っていて、顔はよく見えない。

右手には柄が長く刃先が鋭い鎌。

背中には、烏の羽のように黒くて大きな翼。

「殺さないでくれ、か…。しかし、これはあんたの寿命だから、観念するんだな。」

「ひ、人殺しい!!」

「人殺し？それは、違うな。我々は、ただ任務を遂行しているだけなのだよ。…無駄話はここまでにしよう。」

青年は、おもむろに鎌を振り上げる。

「うわあああ…!!」

「じゃ…さよなら。」

ザシュ!!

鎌は、中年男性の腹部を切り裂いた。

「……………」

青年は、鎌にべっとり付いた男性の血を、青色のハンカチで拭き取り…。

「あと二人…」

バサッ…バサッ…。

翼をはためかせ、その場を去って行った…。

路地には、鮮血で赤く彩られた“中年男性だったもの”が残った…。
……。

「よっ、見てたぜ。また…今回は特別派手にやったな。」

「シークか…。」

シークと呼ばれた男性は、呆れ顔で青年を見ていた。

短い赤髪、黄色い瞳。

「下界のポリ公が騒ぐぜ？『辻斬り魔の仕業か！？』ってな。」

「……………」

青年は興味無さそうに、黒いフードをとった。

緑に近い濃い青色の髪が、さらっと流れる。

瞳は、オレンジ色だった。

「ま、俺には関係ねえし、あんたなりの考えがあるだろうから、口

出しはこんくらいにしとくか。それより…」

「それより…？」

「あんたも可哀想な奴だよな、アルフ。」

「可哀想…？私がか？」

アルフと呼ばれた青年は、怪訝そうに目を細めた。

「ああ…。聞いたぜ…？死神としての初仕事が、彼女を殺すことだったんだろ？」

「そのこと…か。むしろ…良かったと、私は考えているのだが？」

シークは、意外に感じたらしく、細い目をパチパチとさせた。

「ほう…そりやまた、どういう了見だ？」

「…私以外の者に、メルディを殺させたくなかったということだ。…じゃ、また。」

バサッバサッ！！

黒い翼を激しく羽ばたかせ、アルフは下界に飛び立つ。

「それが…あんなりの彼女への愛ってやつかい…。」

シークは、にやりと笑い一人呟いた。

下界の天気は晴天。

すすきを微かに揺らす程度の風が吹いている。

（忘れようとしていたことを…。シーク、思い出させてくれたな。）

彼への怒りでもなく、彼女の悲しみでもない複雑な感情が込み上げた。

アルフは、一瞬悲しげに目を伏せたが、すぐにクールな表情に戻る。

そして…

（本日9人目のターゲットを迎えに行くでしょう…）

目標に向かい、飛ぶ速度を速めた。

彼が降り立ったのは、都心部にある中央総合病院。

緊急病院であり、死者・重病人が後を絶たない。

死神にとっては、まさに…

「格好の狩り場といったところか。」

空から病院を見下ろし、アルフは何気なしに呟く。

高度を下げ、彼はとある病室を窓越しに覗いた。

少女が一人、ベッドに力なく横たわっていた。

顔は青白く、弱々しく呼吸はしていた。

まだ10歳にもならぬであろう幼き命を、病は確実に奪おうとしていた。

「……………」

アルフは、無言で少女を見つめていた。

と、

不思議な気配を感じたのか、不意に少女が目を開けた。

パチ…パチ…とゆっくり瞬きをし、アルフの方に目だけ向ける。

「あなた…死神さん…？」

か細い声で、少女は聞いた。

「そう…私は死神だ。」

「やっぱり…そう…なんだね…。」

軽く目を閉じ、またアルフを見つめる少女。

「…いつまで…生きていられるの…?」

ブォーン…。

飛行機の飛び去る音が流れる。

「今夜… 9時58分。」

アルフは端的に答えた。

窓をすり抜け、少女のベッドの隣にスッと現れる。

「そっか…。ねえ、死神さん…?」

「何?」

「あたしと…お話して…。死神さんのこといっぱい聞かせて…?」

少女は、力無く微笑んだ。

「…私に何を聞きたいのかい?」

「そだ…ね…、お名前は?あたし…シャンテ…。」

「私は…アルフ。」

……。

シャンテがゆっくり深呼吸をすり間、無言の時間が訪れる。

「お歳は…?あたし…9歳…。」

「私は…人間年齢では17歳だ。」

「若い…のね…。あたしの方が…もっと若いけどね…。」

シャンテがクスツと笑い、会話は続く。

アルフは、一時たりともシャンテから目を離さなかった。

午後4時14分。

「アルフって…優しそうな…死神さんね…」

「…そうかい？」

「うん…見た目は…全身真っ黒で…怖いけど…目は…優し…」

ガラッ！

「シャンテちゃん！面会ですよ。」

開いたスライド式ドアから、ナースと彼女の親らしき二人の人物が入ってきた。

「お父さんと…母さん…！…アルフ…また…後で…お話しようね…」

シャンテは、蚊の鳴くような小さなでアルフに伝える。

「…また。」

アルフは、入って来た時と同じように、窓をすりぬけ、外へ出た。

「シャンテ…今日は調子がいいみたいで、良かったなあ。」

父親が言って、

「頑張りなさいね…退院したら、あなたの好きな物何でも作るからね。」

母親も声をかけた。

新米ナースは、それを見届けると、そつと病室を離れた。

「うん…あたしね…」

シャンテの声が遠のく。

アルフは、もうそこには居なかった…。

午後5時02分。

「じゃあ、また来るわね。」

「ゆっくり休みなさい。」

「うん…またね…」

ガラッ…

父親と母親は、シャンテに笑顔で手を振りながら、帰って行く…。

（また…一人になっちゃった…。アルフ…来ないかな…）

そんなことを考えるシャンテを強い睡魔が襲ってきた。

（まだ…生きたいなあ…）

午後7時13分。

「…ンテ…シャンテ…」

自分と呼ぶ声に気づいて、シャンテは目を覚ます。

「アルフ…？」

アルフだった。

開け放った窓の縁に、鎌を背負うようにして肩にかけ、座っている。

彼の腕の中には…

「子犬だ…かわいいね…」

クウクウと寝息を立てている、白いラブラドルの子犬が。

「…風の噂で耳にした。手術…受けないと。」

アルフは、腰を上げ、ベッドの隣にスタツ…と降り立つ。

「うん…受けても…あたし…死んじゃうん…だよ…？あたし…今日
の夜…」

「…受けたら死ぬとは、私は言った覚えはない。私が言った寿命は、
手術を拒んだ場合の寿命だから。」

「クウン…」

目を覚まし、小さな右足で顔をこする子犬。

アルフは、その子犬をそっとシャンテの胸の辺りに置く。

シャンテの表情が、和らぐ。

「かわいい…。手術…痛いよね…？あたし…痛いのは…怖いから…」

ペロペロ。

「くすぐりたい…ふふ…」

子犬は、シャンテの頬を舐め始める。

「しかし…私の鎌よりは痛くないさ。受けると言っならば…命の保障を私がしよう。」

そう語りかけながら、子犬の頭を優しくなでるアルフ。

「クウーン…。」

甘えるような声で鳴く子犬。

ササーッ…と春の夜風が吹いた。

シャンテは丸い瞳をぱちくりさせていた。

「本当に…？」

「本当に。」

「手術受けたら…この子犬…ご褒美に…もらっていい…？」

「受けると約束するなら。」

「そっか…どうしょ…うかな…」

シャンテは、自分の胸の上の子犬を見つめた。

疲れたのか、顎を下につけ眠り始めている。

……。

先ほどより、やや強い風が通り抜けた。

「……………子犬ちゃんと…まだ…たくさん…遊びたい…。あたし……………手術…受け…よっかな…」

「そうかい…」

「あっ…」

シャンテから子犬が引き離される。

「君が約束を守れたら…また子犬と会わせるから…。」

「うん…」

「…すぐにドクターがここに来る。その時に…今の返事、忘れないように。」

「わかった…」

ササーッ…

三度目の風が吹き荒れ…

「では…また。小さなレディ…」

子犬を抱え、翼を広げ、アルフは夜の空へと舞い上がったのだ…。

午後9時57分。

ガラッ。

緊急オペ室の電気が消え、ドクターが部屋から出て来た。

心配顔の父と母。

「先生…シャントは…？」

「手術は成功したんですか！？」

二人に問われ、ドクターは…

「ご安心下さい。手術は成功。早ければ、二週間で退院できますよ。」

にこりと笑って答えた。

「さて…恨みや因縁は何も無いけれど、仕事だからね…」

同じ頃、アルフはシャンテの隣の病室に居た。

個室のベッドに患者は横たわっていた。

80代過ぎの白髪の老翁。

ヒューヒューと苦しい呼吸が聞こえる。

「あと…10…」

チッ…

チッ…

チッ…。

「…………時間ジャスト。」

アルフは鎌を振り上げた。

シュッ…！

風を斬る音がして…

…………。

呼吸音が消えた。

老翁は眠るようにして、その生命を全うしたのだ。

「冥福を祈る…では。」

バサッ…！

彼が飛び去った病室には、黒い羽が三枚、床に落ちていた…。

（シャンテの手術は成功したようだ…）

窓越しにシャンテの病室を覗き、アルフは顔に安堵の色を見せる。

満月に照らされた顔には、めったにない微笑みの表情があった。

「…次の仕事に行くかな。」

一人呟いて、彼が翼を大きく羽ばたかせた時だった。

「待て!!」

何者かの怒鳴り声が夜の闇に響いた。

アルフは、声のした方を向く。

「あんたは…リアゼだったかな。」

「アルフ…おまえ、なぜあの子を助けた!？」

リアゼと呼ばれた者は、黄色い髪、黒い瞳を持った死神。

15センチほどの小さな鎌を、黒いコートに無数に忍ばせていると噂。

「…シャンテは、手術さえ受ければ寿命は伸びる者。つまり…死ぬべきではない人間だからかな。」

「人のターゲットにちよつかいだしたあげく、言い訳がそれか!許

さねえ…!!」

アルフは、やれやれといったように、ふうと深いため息をつく。

「アルフ…普段から気に入らないんだよ!!消えなっ!!」

ヒュヒュッ!!

怒りで我を忘れた者ほど、手を付けられぬ者はいない。

リアゼは、阿修羅のような形相でアルフに鎌を投げつけた。

カキーン!

カーン!

アルフは大鎌でそれを払いのける。

「神力は私の方が高い…。諦めて帰…」

「問答無用だ!!」

ヒュヒュッ！

シュン！

カキカキッ！

アルフは二つの小鎌を払いのけ、頬横を通り過ぎた鎌はひょいとかわす。

「無駄と言っているのに…」

「ふふ……」

リアゼは不敵に笑った。

「……………？何かおかし……ぐっ！？」

トスツ……という音と共に、アルフが苦悶の表情を浮かべた。

背中に、小鎌が一本刺さっていた。

「鎌が……ブーメランの……ように……戻って……来た……のか……」

「ふふ……鎌にはこういう使い方があるんだぜ！良いこと教えてやるよ……鎌には、強力な毒が塗ってある。死神でも太刀打ちできねえよいな毒がな！」

「……………っ……」

傷口からは、鮮血がポタポタと流れ落ちる。

それは、アスファルトで固められた地面を灰色から赤に染める。

「じゃあな…アルフ！」

ヒュヒュッ！

トストストス…！！

動けないアルフの全身に、多数の鎌が襲った。

「…っ………」

アルフの体は…崩れ落ちるように地面へと落下していったのだ…。

「神力を頼って、油断したのが敗因だぜ！ふふふ…あっはは！」

リアゼは空を見上げ、高笑いした。

（これで、俺の邪魔をする者はいない！）

そう確信しながら。

「油断したのは、君の方さ。」

「何…！？」

振り返ろうとしたリアゼの体を、アルフが後ろから掴んでいた。

首に鎌を突きつけられ、リアゼは身動きが不可になる。

「なっ…！？なんで生きてるんだ！？確かに俺の鎌が、貫いたはずだろ…！？」

「…私が落ちていった場所、見てみるがよい。」

アルフは冷ややかに言った。

その方向をリアゼが目だけ動かし見てみると…

「なっ…人形だと…!？」

真っ白な人型の人形が落ちていた。

「鮮血は！？確かに流れていたはずだ！」

「…下界から血のりというものを借りてね。それを使っただけなのだよ。それより…まだ戦意があるならば、私はあんたを消さなければならなくなる。」

「負けたぜ…。アルフの判断に任す…。消すなら、消しなっ！」

リアゼは、観念して目を瞑る。

「そうか…」

スッ…。

アルフは鎌をリアゼの首から離し、何事も無かったかのように天界に飛び立つ。

驚いたのは、リアゼだ。

「消さないだと…！？一体…どういっつもりなんだ…アルフ…」

釈然としないもどかしさを抱え、彼もまた飛び立った。

バサッ…

バサッ…

二つの羽音だけが、静かな空間を裂いていた…。

「……………」

「アールフ」

下界をぼうつと眺めていたアルフに、女の子が声をかける。

アルフは振り向き、

「イリアか…」

一言だけ言葉を返す。

「そう！いつもハチャメチャ元気のイーリアちゃん♪アルフを励ましにさーん上！」

イリアは、片目ウィンクし、人差し指をぴつと突きつけた。

反動でピンクのウェーブ髪がふわりと揺れる。

「励まし？別に落ち込んではいけれど？」

「まーたまた！イリアちゃんの前では、嘘つかなくていいの！…閻魔様に怒られたんでしょ？あたし、きーいちゃったもん♪」

「ああ…そのことかい。」

「うん！安心して！他の死神から何か言われたら、このイーリアちゃんが無言で…」

「アルフ！…」

「な…なによ…せつかくのいいムードを邪魔するなんて！」

イリアは、むくれ顔で声の主を探す。

「アルフ！兄貴と呼ばせてくれ…いや、呼ばせて下さい！」

リアゼだった。

昨夜とは態度が一変。

アルフの前に来るなり、土下座しながら頼んだ。

アルフは妙な顔をしていた。

（兄貴と呼ばせてくれ…？）

「ちょっとお…リアゼだっけ？何、企んでるの？…言っとくけど、アルフに手を出したら、このイーリアちゃんが消してやるんだから！」

「俺は純粹に、アルフに敬服しただけだ！」

負けじと言い返すリアゼ。

「むー！アルフを殺そうとしたくせにー！！“兄貴”なんて都合良すぎー！」

「確かにそうだ！それは否定しねえけど、死神界の掟にもあるだろ？“負けた者は勝った者に従う”と！」

「…うるさいー」

バツー！！

アルフは、二人のケンカに嫌気がさしたようで、翼を素早く広げ、“襠”（下界での“街”と同じ意味）に飛び去っていく。

バサッ…バサッ…！

「あー！アルフリー！待ってよー！！」

「兄貴！俺も行くぜ！！」

「あんたは来なくていいの！あたしとアルフの仲を邪魔しないでよっ！」

「うるせえ！そっちこそ、兄貴に付きまとうなよ！！」

バサバサッ…

バサバサッ！！

口ゲンカをしながら、二人の死神も襠を目指していった……。

彼らはまだ知らなかった。

本当のアルフというものを……。

To be continued...

死神の涙（前編）

「ハアハア…ハア…」

彼女は逃げていた。

暗闇で下に何があるのか、どの辺りを走っているのかわからない。

ただ…追ってくる者から逃げることにしか頭に無かった。

（あと少し…あと少しで交番が見えるはず…！そこまで行けば…）

彼女の体力は限界に近かったが、足を止めはしなかった。

ザッ…

ザザッ…

ザッ…。

“そいつ”も追跡の手を止めなかった。

「ハアハア…この角を曲がれば…着き…」

ザシュ！！

……。

ドサッ…！

彼女は声も無く倒れ…

その背からは…おびただしい鮮血が溢れていたのだ…。

「ふふふ…」

笑っている。

躊躇なく殺人を犯した“そいつ”は、笑いながら夜の闇に姿を消していったのだ……。

「『連続通り魔事件！怯える付近の住民達！犯人は…何処に！？』
だよ。ほら、あんたも読んでみな。」

ヒュッ
…

パシッ！

筒状に丸められ投げられた新聞を、右手で器用に受け止めるアルフ。

「通り魔、か…。」

「あんたは、どう思う？、また、どうするよ？、」

「さあな…。」

二人にだけしかわからない会話はまだまだ続く。

「下界のことなんざ、俺達には関係ないけどよ…もしそうだとしたら…」

「天界にも影響あるな…」

「なにになに？イーリアちゃんにも教えてよ！」

「うおっ！？嬢ちゃんか……」

突然のイーリアの出現に、シークは後ろに身を引いた。

細い目は、大きく上下に開かれる。

「イーリアか……」

対照的に、アルフは全く驚いていなかった。

普段から付き纏われているアルフは、イーリアのサプライズには慣れっこになっている。

カサッ…。

いつもと変わらぬ表情で、新聞をめくる。

『山下芽理、ついに結婚！？お相手は、俳優の。。。！』という記事が目についた。

「シーク、驚きすぎい！あたしは、お化けじゃないんだから、そんなビックリしないでいいじゃん！」

「お化けよりも恐ろしい死神だしな。」

ははは、とシークは豪快に笑ってみせた。

「自分で言つて、自分で笑うなんてオヤジ！」

そう言うイリアも、クスクスと小さな笑みを浮かべていた。

「イリア…読むか？」

アルフは、イリアに新聞を手渡す。

「ありがとう。えーっと…へえ、山下芽理が結婚したんだ？あたしもアルフと結婚したいなあ…。それから…通り魔事件…。あたし…狙われちゃったら、ど、どうしょー？」

「いや…むしろ返り討ちだろうが！」

シークの突っ込み。

「下界も大変だね…。」

「そうだな…。さて…そろそろ行かないとな。」

アルフは腰を上げる。

彼が座っていたのは、雲を固めて作ったイス。

「あたしも行ってこよーっと。早く終わらせて、エマと買い物ーつと！」

イリアは微笑みながら、愛用の鎌を振り上げる。

柄の先に二つの刃が付いた鎌を。

「通り魔に気を付けな、お二人さん。」

年寄りくさいセリフを吐きながら、シークも立ち上がる。

そして三人の死神は…

ババツ！

バサツ…

バサツ…

バサツ…。

三方向に一斉に飛び去っていった…。

「ここ、か…」

アルフは、黒ずんでしまった地面を見下ろしていた。

地にしっかり足を付けて。

翼は折りたたみ、人間の姿で。

そこは、昨日通り魔事件が起きた現場であつた。

遺体は片付けられていたが、血の跡はまだ残っていた。

被害者は直前まで逃げていたらしく、血の跡は前に長く広く伸びていた。

両側に壁があり、人一人通れるか通れないかの狭い路地であつた。

路地から15メートルほど離れた前方に、交番があつた。

「交番に逃げ込もうとしていた被害者を、後ろから一太刀か……。ん……？」

何かが光った。

ゴミが溢れんばかりに入れられている、青いバケツの上。

「なんだ…？」

アルフは、人差し指と親指で光る者を摘んだ。

それは…電気のように明るく光る刻印であつた。

直径5センチ弱、薄さ3ミリ強。

真中に吠える竜の姿が描かれている。

人間には見えない特殊な印。

「やはり…あいつが…」

刻印に見覚えがあつた。

（まだ存在していたのか…。）

スパッ！！

アルフは刻印を鎌で斬る。

スッと刻印は消えた。

「避けられぬ戦い、か…」

意味深な言葉を残し、アルフはその場から姿を消した。

いや…正確には歩き去っただけだが。

通常の人間では考えられないほどの、スピードで…。
スパーン！

スパスパーン!!

昼間の草原に、鎌の音が響いていた。

「うつ…」

人々のうめく声が、少しずつ減っていく。

生き残った者も、やがて全て…。

「ふふ…イリアって、超ラッキー！飛行機墜落事故現場でお仕事なんて！ノルマなんか軽々クリアできちゃうし」。

二本の鎌で、次々と人を斬っていたのは、紛れもなくイリアであっ

た。

「あーと5人！」

スパーン！

ザシュ！

「あー… 楽すぎて退屈だなあ。 アルフと一緒にお仕事できたら良かったのになあ…」

最後の一人を斬り終え、イリアはつまらなそうに言った。

うめき声は完全に無くなって… つまり生存者は居なくなっただということ。

（それにしても… あれは、人間の芸当じゃないよねっ！ ってことは、もしかしたら“あいつ”なのかも！ アルフ… 気付いたかなあ。）

そんなことを思いながら、イリアは鎌の刃をハンカチで拭いていた。

白いレースのハンカチは、赤黒く染まっていた…。

所変わって…

「なあ…爺さん。似てねえか？あの時は天界だったが、今回は下界で起こっている…」

「…そうやのう。ズズツ…」

「のんびりお茶飲んでる場合じゃないだろー一応、最高神力者なんだから、アドバイスするなり、とめるなりしないと…」

シークは庵に来ていた。

神力庵。

（相変わらずネーミングセンスのねえ庵だなー）

シークは密かに思った。

しかし、今はそんなことを考えている暇はないことを思い出し、爺さんを説得する。

「頼むぜ…本当に！あんたの孫のアルフも危ねえかもしれないんだからよ！」

「なぬ…アルフが関わろうとしているのか？」

ピクツと、爺さんの体が反応した。

「わからねえけれど…アルフは、天界での“あいつ”を倒した奴だから、狙われてもおかしくはないってわけだ。」

「ふむう…」

「だから、爺さん。孫を救うと思って、手伝っ…」

「すう…」

「言ってるそばからかよ！」

シークはため息混じりに言って、眠りこけた爺さんを残し、庵から仕事場へと移動した。

「ちっ…あの女のせいで兄貴とゆっくり話せねえ…」

カーン！

リアゼは落ちていた空き缶を、忌々しげに蹴っ飛ばした。

十三番街。

彼の今回の仕事場は、建設工事があった。

（20階建てビル建設予定、か。無駄に金使いたがる生き物だぜ…人間は。）

ガガーと凄まじい音を立てながら、ブルドーザーやクレーンが動いていた。

（さっさと仕事終わらして、兄貴を探し…）

ザシャ！

ズバツ！

鋭い斬音。

「うわあああ……」

「きゃあ!？」

人々の悲鳴。

「な、なんだ……!？」

リアゼは目の前の光景を疑った。

かまいたちのような風で、人々が斬られていた。

背中……

腹部……

手…

足…

鮮血をほとばしらせて、見る間に倒れていく。

気付いた人々は、悲鳴を上げながら逃げていくが、その風は執拗なまでに彼らを追う。

「うわっ!？」

спан!

リアゼの隣にあった“駐車禁止”の標識が真っ二つになった。

と、

「…アルフはどこだ？」

風の中から声がして、死神が一人現れた。

声は低く大人びているのというのに、顔は幼かった。

「なんだよ、おまえ！人のエリア、荒らすなよな！」

「アルフの居場所を言え。」

その死神は完全にリアゼの言葉を無視した。

「兄貴なら仕事だろうよ…こっちが聞きたいぐらいだぜ！」

「アルフに言っておけ。止めたくば…明日太陽が沈む直前にこの場所に来いと。」

「人の話を聞け！！！」

やや怒りながら、リアゼは小鎌を投げつける。

ヒュン…

シュン！

鎌が当たる直前で、死神は風と共に消え去った。

「なんなんだ…あいつ？言いたいことだけ言って逃げやがって！くそっ…！」

ガッツ！

地面に力いっぱい投げつけられた鎌は…半分に折れていた。

「痛い…」

「助けて…」

うめき声と赤い液体を流しながら、人々は力尽きていった…。

「あっ！兄貴！探してたんすよ。顔をフードですっぽり隠した死神が兄貴に伝言だそうす。」

「…カナルと会ったのか。」

「カナルっていう奴なんすか…。ちらつと見たんですが、髪は深緑色で幼い感じがしたっす。」

リアゼがボディランゲージで特徴を伝える。

暗くなったことを感知した街灯が自動で点灯した。

「カナルの伝言とは？」

「なんか…『明日太陽が沈む直前に13番街の建設予定地に来い』だそうっす。…兄貴、行くんすか？」

「これ以上、無関係の者を巻き込めないからな。それに…」

「それに…？」

アルフは一呼吸置いて言う。

「カナルは…私の弟でもあり、天界での無差別殺人犯でもあるからな。」

「…そうなんすか。もっと詳しく…」

「アールフ、やっぱ知ってたんだね…。知らなかったら、教えてあげようと思ってただけだ。」

「また出やがったな…ストーカー娘。」

言葉を遮ったイリアに対しての呟き。

「誰がストーカーだってえ!？」

「聞こえてたのかよ…耳だけはいってやつか。」

「るさいっ!!」

スカッ…

イリアの足は、虚しく宙を蹴った。

「……………」

やや呆れ気味のアルフ。

「あつ…あたしったら、アルフの前ではしたなかった…」呆れない
でよー、アルフ」

イリアはおどけながら、アルフの背中に抱きつく。

それを見たリアゼは、

「兄貴が迷惑がってるだろい！！」

イリアの体をぐいっと引っ張り、アルフから引き離そうとする。

「リアゼ……」

「兄貴、待っててください！この迷惑女は俺がどかし……」

「カナルは、“どっち”だったか？」

「へっ？のわっ！？」

ドタッ！

気を緩めた瞬間、イリアに蹴りを受け、尻餅をつくりアゼ。

「痛てて……」

「ふーんだ！女の子に乱暴するから、天罰が下ったんだよー♪」

そう言って、あっかんべーをするイリアは、とても死神には見えな

い。

「くそっ…あとで覚えてろよ…。あつ、兄貴。“どっち”って、カナルってのが逃げた方向のことっすか？」

「…唐突すぎたみたいだな。カナルについて少し話しておくか。」

「は、はいっす！」

「イリアちゃんも聞く〜！」

イリアはアルフの背中から下り、ちょこんとその場に座った。

雲がぼよつと揺れた。

リアゼは、こいつと見つめ合いたくねえ、とイリアから1メートルほど離れた右隣に座った。

パフツと揺れる灰色雲。

アルフは二人の前に立ちすくし、話し始めた。

「あれは…5年前のこと。天界で“連続死神殺傷事件”が起きたのさ。…話だけではわかりにくいな。スクリーンを使うか。」

途中からは独り言のように小声で言っ、アルフは何も無い空間に鎌をヒュッと一振り。

すると…

ブイーン！

妙な音がして、リアゼとイリアの目の前に画面が現れた。

まるで映画が写し出されるようなスクリーン。

「“記憶スクリーン”だね♪さっすがは、アルフ♪気が利くねっ！
どこかの誰かさんとは大違い！」

「ケンカ売ってんのか!？」

リアゼが激しい剣幕で怒鳴る。

「リアゼ…イリア…準備はいいかい？」

アルフが聞いて、

「はい」

「ストーカー毒舌女め、見てろよな…。OKです。」

イリアは上機嫌。

リアゼは、不機嫌そうに眉をひそめて答える。

ブイーンとまた音がして、スクリーンに二人の死神が映った……。

< 5 年前、 天界中央部 >

「なーんだ、 アルフも死んじゃったのかよ！」

サファイアブルーの髪の死神が残念そうに言った。

瞳は茶色に近いオレンジ色。

「カナル…。まさか、本当に天界があるとはな。」

「あつたり前さ！俺も初めは驚いたけど、慣れって怖いものだ。」

「慣れ、か…。」

「全く…フィアラ家は早死の家庭なんだろうな。まあ、それはよしとして…」

意味ありげににっと笑うカナル。

「アルフ、これからは兄弟仲良く死神やろう！それで、俺とアルフは天界一凄腕死神コンビになるんだ！」

「天界一の死神コンビ…？」

「そうさ！やろうぜ、アルフ！そりゃ突然死んじゃってさ、まだ気持ちの整理がつかないだろうけど…。俺、さみしかったしな。アルフはたった一人の肉親だから、一緒に居たいって思いがあるんだ。死神ライフも悪くないぜ♪」

アルフは数秒置いて…

「…そうだな。何にしろ、過去も人間としての生活も取り戻せない。一人でやっていくつもりだったが…兄弟で天界一を目指すのも悪くないな。」

「んじゃ、改めてよろしくな、アルフ…いや兄さん！」

「ああ。」

差し伸べられた弟の手を、アルフはしっかりと握った。

「カナル、アルフにそっくり♪仲良しだったんだね♪でも、こんな仲良しなのに、どうしてケンカしちゃったの？」

イリアが不思議そうに尋ねた。

「ケンカじゃないのだよ、イリア。カナルと戦わなければならなかった理由は…」

「兄貴！そんな辛そうな顔して…直接言いたくないんすよね？だったら、スクリーンで見るから言わなくて言いっすよ！」

「わかった。続けるな…。」

アルフは言いかけた言葉を心にしまい、スクリーンを投影し続ける。

「むっ…後から来たくせにやけに氣遣いするじゃん…。なんか…やっぱりムカつくくく…!!」

イリアの叫びは、スクリーンの音でかき消されることになる…。

ガン…!!

「…っ…はあ…はあ…。」

カナルの鎌から放たれた衝撃波は、アルフの体を噴水にぶつけた。

噴水の水がピタと止まる。

元気な死神は、どこへともなく逃げ去っていた。

傷付いた死神は、雲にひれ伏し苦しそうに顔を歪めていた。

「あつ…うつ…」

という呻き声がひっきりなしに聞こえる。

「なぜだ…カナル…。なぜ…こんなことを…」

鎌を持ち直し、よろめきながらも体制を立て直すアルフ。

翼はぱつきりと折れ、フードの至る所が破れていた。

血も滲み出している。

痛みと出血で意識が朦朧としていた。

ザッ
…

ザッ
…

ザッ
…

一歩ずつアルフに歩み寄るリアゼ。

その顔に懺悔や哀れみの色は無い。

「答えろ…カナル…！天界一の…死神…目指すのでは……なかつ……たのか…！」

息は絶えだえ。

それだけ言つと、アルフの体はズツと下がる。

「ああ…言っ たさ、アルフ。天界一の死神になるとな。それには…
おまえが邪魔なんだよ…。」

冷やかにアルフを見下すカナル。

「カ…ナル…」

「ふふ…次で終わりだ。」

カナルは、鎌にぐつと力を込め…

「さらばだ…アルフレッド・フィアラ…！」

ゴ…ッ…！！

風で轟音を立てながら、アルフに体当たりした。

ドッ……！

……。

しばしの静寂……。

やがて……

「受け止めた……だと……ばかな……」

ドサッ……

倒れたのは、カナルの方だった。

アルフの鎌の柄が、カナルの腹部を直撃していたのだ。

「…これで…なんとか…」

スッ…。

アルフの意識は、そこで途切れた。

スクリーンが消えた。

「えっ？この後、どうなったの〜！？アルフ…まさか死んじゃったの？」

「生きてるから、俺達と話せるんだろぅが！それくらいも考えつかないのかよ、ストーカーむす…」

ドカドカツ!!

「痛っ!?!何すんだよ!?!」

本日二度目になるイリアの足蹴りは、今度は確実にリアゼにヒット。

「うるさい!!今度ストーカーって言ったら、この鎌で切り刻んじゃうんだから!!」

鎌を突きつけすこんでみせるイリア。

上機嫌は不機嫌へと一転している。

「ちっ…兄貴、こんな奴ほっというて、続きを…」

「こんな奴って何よ！！こんな奴って！」

彼女の怒りは頂点に達していた。

しかし、

「イリア…落ち着け」

アルフのこの一声でイリアは、すぐに笑顔になった。

「はい、イリア、なだめられちゃった…はーんせい、アルフ、結局どうなったの？」

「…気が付けば、千爺の庵のベッドの上にいた。体全体に包帯が巻いていて、動こうとすると激痛が走った。『まだ動くでない。生きていたのが奇跡なぐらいじゃからな。正確には“存在が消えなかった”ことが奇跡じゃな、死んでいるのだからのう。』千爺の言葉を聞きながら、私はある不安を抱えていた。」

「不安、っすか。」

リアゼが言葉を繰り返す。

「ああ…だから、千爺に聞いた。『カナルはどうなったのかと。』
千爺は、すぐに答えたさ。『カナルは…天界少年院に連れて行かれたようじゃ』と。」

「えっ？今下界に居るってことは……まさかあそこから出れたってこと？嘘！？」

「タフな野郎だな…」

イリアとリアゼは、感嘆した。

「…これを見てくれ。」

「んっ？何っすか、それ？」

アルフの手の平には、薄く光る刻印が現れていた。

「ん？何だろう…見たことないなあ」

イリアは、よく見ようと目を細めて顔を近付ける。

「見たことない、か…。当然だな。これは…私がカナルを封印した刻印なのだよ。」

「じゃ…元々は兄貴の鎌の柄の裏側についてた物なんすか？」

「ああ。」

アルフは二人が顔を離れたのを確認してから、刻印をふつと消す。

「リアゼ。」

「何っすか、兄貴？」

「どっちだと聞いた理由…なんとなくわかったかい？」

リアゼは、少し間を置いて、わかったつと返事をした。

「たぶん…いや、絶対違うっすよ…。兄貴の弟だった奴とは。」

「ねえねえ、アルフ…？イリア、思ったんだけど、カナル君って統合失調症？だっけ。それじゃないの？」

アルフは目を見張った。

「イリア…よく知っているんだな。その通り…カナルは多重人格の重症化したものともいえる、それなのだよ。」

「ま、待った！つつうことはですね…奴の中には、純粋なカナルつてのもまだあるってことなんすよね…。兄貴…まさか…」

「…そのまさか、だよ。私は…自分の弟を…カナルを…いいあいつも悪いあいつも合わせて、消すつもりなのだよ。」

「兄貴…」

「アルフ…」

イリアもリアゼも、かける言葉が見つからなかった。

「……………もう夜も更けてきたな。イリア、リアゼ。疲れてるだろうから、帰って寝た方がいいと思う。私は…明日に向けて今から鍛錬してくるから。」

「あたしも何か力に…」

「…行くぞ、ストーカー娘。」

「ストーカー言うな…!!…あつ、ちょっと…!何すんのよ!離しなさい…!!」

暴れるイリアの腕を引っ張って、リアゼは北へ歩いて行った。

一度だけアルフに礼をして、その後は振り返らずに……。

死神の涙（後編）

「時は…早く過ぎ去り…」

「絆は脆く崩れる…」

「戦いの果てに見えるのは…」

「喜びか…」

「悲しみか…」

カナルは歌っていた…。

十三番街の、ビル建設予定地…。

その真前の電柱の上に座って。

「また一つ…」

「存在が消える…」

太陽が沈みかけていた。

「…逃げたか、アルフ。」

「誰が逃げたというのかい、カナル。」

アルフの声を耳にし、カナルは電柱から道路を見下ろす。

「死神のレクイエム、か…。風流なことをするものだな。」

「ふふ…待ちくたびれたよ、アルフレッド・フィアラ…」

スタツ…

カナルは道路に降り立ち、アルフと対峙する。

「そうかい…。」

「その瞳…まだ信じたいようだな、俺が弟だと。もう一人の“俺”とは違う、純粋なままの俺だと…」

「できればな…」

アルフの視線とカナルの視線が完全に合った。

「そうかそうか…残念ながら、おまえの弟としてのカナルは居ないのだよ…。」

「それを聞いて…覚悟が決まった。」

シュッ…

ヒュッ…!!

アルフは、カナルに向けて鎌を振り下ろした。

カンッ！

風神の紋章が装飾された鎌。

カナルは、その鎌で易々と受け止めた。

パツとアルフは、カナルから離れる。

「なかなかやるようだな。しかし…」

ヒュッ…

今度はカナルが鎌を振り下ろした。

竜巻が出現し、アルフに直撃…

「くっ…そつちも腕は落ちてないな…。」

アルフは肩を切られたが、早い判断によりて致命傷は避けられた。

ポタッ…と、肩の傷から血が落ちる。

「むしろ、調子が良くなっただけだ!」

言葉を言い終わるか終わらないかの内に、カナルはアルフのすぐ前に移動。

「!」

「再会のプレゼントだ、アルフ!」

ヒュッ…

ガチッ!

鎌と鎌が触れ合って、金属音を立てる。

「こんなプレゼントは…お断りだな。」

カンッ！

アルフの鎌が、弾き返す。

「一度ではないぞ！！」

ガシュッ！

「くっ…！」

カナルが振り上げた鎌は、アルフの反対側の方を切り裂く。

「どうした、アルフ！！本気を出すかよいつ！！」

「本気…か。」

アルフは少しためらっているようだった。

ザッ！！

もう一度カナルと距離を置く。

「離れようが、俺の攻撃は避けられぬぞ！！いけっ、斬り風！！」

シュンシュン！！

ズバッ…

スパン…！！

かまいたちのように激しい風が幾つも現れ、アルフの体を斬り刻む。

しかし、悲鳴は聞こえない。

「身代わりか……」

アルフの居た場所には、傷だらけの無残な姿の人形があった。

「そうだ……今更気づいても遅いかなっ!!」

消えたと思われた彼は、カナルの真後ろに居て、カナルの背中に――
太刀……

スパッ……

スパン!!

「……っ……」

紋章付きの鎌が、カランカランと音を立てて、地面に落ちた。

カナルの背中では、傷は全く無かった。

代わりに…

「どうだ、アルフ。俺のかまいたちの味は？」

アルフは全身をズタズタに斬られていた。

身代わりを使い、かわしたはずのかまいたちは、実はおとり。

本当のかまいたちが…アルフの体を常に追い回していたのだ。

「ふふ…痛いかな、アルフ？今…楽にしてやるぞっ！！」

ザシュ！

風神の力を宿した鎌がアルフの胸元を斬る。

「カナ…ル…」

………ドサッ！！

体の重みを支えきれないアルフの体は、地面に強く叩きつけられた。

翼が曲がってはいけない方向に曲がり…

全身から、人間ならば死は確実なほど出血し…

目の開きは薄く…

意識は消えかけていた…。

「どういうこと！？アルフとカナルは、ここに来てるんじゃないのー！？」

「たぶん…次元が違ってるだろうぜ…。」

「次元…？意味わかんないよー！！」

「…人間の頃、なんかの本で読んだことある。人間界には、次元が

無数にあつて、人間はその一つに存在してるだけなんだとよ。だから…、俺達が居る次元と違う次元に、兄貴とカナルは居るつつこ
とだ。」

混乱して、あたふた飛び回るイリアに、リアゼがそう説明。

二人は、アルフ達が戦っているはずの場所に来ていた。

どうしても行くときかないイリアに、最初は反対していたリアゼも折れたのである。

というのも、本音を言えば、リアゼもイリアと同じくらいアルフのことが心配だからだ。

「じゃあ…アルフのすぐ近くに居るのに、手伝えないってこと!？」

「そついうことだな。」

「そんな…」

「仕方ねえだろ、俺だって悔しいんだぜ!兄貴が戦ってるつつこの

に、手を貸せねえなんて…。俺達は、心で応援するしかねえんだ…」

イリアは涙ぐんだ顔で、きつとカナルを睨む。

「わかってるもんっ！！わかってるけど…それだけじゃ嫌！アルフも、アルフの弟のカナルも、助ける方法があるはずだもんっ…！」

「それがあつたら…兄貴は弟を消すなんて、宣言しないだろうよ…」

リアゼは、イリアから顔をそむけて、いつもの彼に無く悲しげにうつむいていた。

そこは無の世界…

真っ暗で、うつすらとしか地が見えない。

アルフの心は、無意識の泉に誘われていた。

（私はこのまま…カナルを救えないまま…消えるのだろうか？）

襲ってくる弱気な声。

『消えちゃえば楽だよ…』

『メルディへの罪滅ぼしには、消えるしかないよ…』

『起き上がっても、またやられるだけさ。』

（私の存在が消えることがカナルにとっても…天界にとっても都合良いことなのか…？）

『ダメよ…アルフ。』

先ほどとは違う声でした。

ピチャ…

光り波打ち始めた泉。

そこから聞こえる。

（誰かい…？）

『アルフ…諦めないで…。あなたの鎌を使えば、カナルを救えるはずよ…。』

（メルディ…？）

『もう一度…自分を信じて…』

「…あの時と同じだ。しかし、一つだけ違うな。それは…二度目の

幸運は存在しないことだ!!」

ヒュッ…!!

パシッ!!

「!？」

カナルは、目を大きく見開いた。

完全に意識が無いと思っていたたアルフが、カナルの鎌を素手で止めたからである。

「まだ…動けるといのか!？」

「カナル…昔…おまえが…聞いた…質問の答え…見せてやろう。」

「ちっ…! 離せ!!」

ガキーン！

目を瞑り、アルフはカナルの鎌の柄を薙ぎ払う。

「死に損ないにしてはやるようだな…！」

カナルは、ひるんでいた。

（この闘気…くたばり損ないにしては、強すぎる…）

「カナル…私の鎌は…」

アルフはゆっくりと立ち上がり、鎌を構える。

「その答えなど、どうでもよい！消えろ、アルフレッド・フィアラ

「!!」

ヒュッ…

ピッ…!

スパン!

カナルの鎌から放たれた風は、アルフの頬と横腹を斬る。

アルフは避けようとせず、うつむいて立っていた。

「消滅を覚悟したか、アルフ。」

「違うさ…カナル。」

「違おうが、合っていないようが関係ないがなっ!!」

ヒュッヒュッ!!

バシュ!

スパン!

次は、脚と腕。

流血は赤く円状に広がり、地面を染めていく。

…彼は倒れなかった。

「さあ…アルフ。立っているのが苦しくなってきただろう。もうすぐ…眠らしてやるよ!」

パアッ
…

カナルの鎌が、灰色に鈍く光った。

「眠れっ！！荒れ狂うつむじ風！！」

バシュ
…！！

音速並みの速さの風がアルフに突進する。

ガッ
…

シュッ
…

風はアルフの鎌に吸い込まれるように消えた。

「…俺の奥義を見切れただど！？な、なぜ…？」

「簡単な…理論さ。カナル…おまえの神力を…私の神力が…上回ったのだよ。」

顔を上げて、カナルを見据えるアルフ。

ツーツと額から一筋の血が流れる。

「神力が上回っただと…！？」

「そう…だ。それこそが…私の…鎌の…力だ。」

「ふざけるなっ…！」

バシユ！！

シュツ…。

やはり、風は吸い込まれている。

「無駄さ…カナル。なぜならば…この神力は…元々は…おまえの…物だからだ…。さよならだ…カナル…」

「消えるのは、おまえだ!!」

ヒュッ…

バシュ…

二つの鎌。

同時に振り下ろされ、一方は光の波。

一方は、風を放つ。

そして…

「見事だよ…兄さん…。」

「カナル…結局助けられなかったな…」

勝者はアルフだった。

負けたカナルの体は、透けて消え始めていた。

アルフは、力を振り絞ってカナルの元へ駆け寄った。

「できれば…おまえを救い…たかった…。」

アルフの頬に冷たい水が流れる。

それは、地面に当たり、ポタツと小さな音を立てる。

ピチャ…

ピチャ…

それを隠してくれるかのように、空から滴が落ち始める。

「ううん、アルフ…俺は救われたんだぜ。これでもう…誰も傷つけなくていい。死神としての…道を間違えることもないんだからなっ！」

カナルは微笑みながら、親指をぐっと立てる。

「救えて…ないさ…。」

「全く…アルフは頭固えんだから！俺が救れたって言うてんだから、悲観的になるなよ！…あ、そうだ、これ。」

カナルは、アルフに自分の鎌を差し出す。

「鎌を差し出す意味…知ってるよな？頼むぜ…アルフ…。」

「…ああ。」

ポツ…

ポツ…

ザー…！！

雨が、激しく地面を打つ。

まるで…そう。

カナルの存在が消えることを、一緒に悲しんでくれるかのように…

今や、彼の体は光の粒となり…完全に消える一歩手前まできていた。

「カナル…」

「お別れだ…最期に握手しようぜ、アルフ！照れくさいとかどうとかは、今は関係ねえし。」

そう明るく言って、カナルは右手を差し出す。

「……………」

アルフは無言でカナルの手を握った。

強く…暖かい手…。

「最期のわがまま聞いてくれて…ありがとな！生まれ変わったら、また兄弟として…」

シュツ…

カナルの体が完全に消えた。

握っていた手には、冷たい雨の滴がかかっていた…。

「アルフ…!!」

上空からイリアの大声が聞こえてきた。

「兄貴！無事ですか？」

少し遅れて、リアゼの声も。

それでも…アルフは鎌を見つめたまま、座り込んでいた。

ザー…！！

雨の勢いは、増すばかりで、彼の全身はびしょ濡れだった。

しかし、今の彼にそんなことは些細なことではなかった…。

彼の中では、メルデイの時と同じ気持ち…後悔と悲しみがあるだけだった…。

バサッ…

バサッ…

二人の死神は、アルフの左右に降り立つ。

「大丈夫！？傷だらけじゃない！！」

「兄貴…次元がさっき戻ったばかりなんで、遅くなってすみません
っす…」

「イリア…リアゼ…」

アルフは蚊の鳴くような小さな声で二人の名を呼ぶ。

「何っすか？」

「しっ！黙ってて今、治すから…」

「私は…また…同じ過ちを…繰り返してしまった…のだよ。カナル
に…兄として何もしてやれなかつ…」

「パアッ…」

突如、カナルの残した鎌が白く光った。

そして、

とアルフの鎌とガチンと重なったのだ。

「な、なに…？」

「鎌が共生している…？」

二人が驚く中、アルフの鎌も光り始め、アルフの体を白い光が包む。

カッ！！

「きゃっ！？」

「うわっ!？」

目が眩むほどの閃光。

(カナルの心を感じる…)

イリアとリアゼが目をつぶった本の0コマ数秒の間に…アルフの体は…。

「これが…共生と覚力か。」

傷が消え、血が完全に止まった健康体に戻っていた。

キラキラと光の粒がまとい…。

黒い翼は、黒真珠のような輝きを帯び…。

「わあ…♪アルフ、きれい…!!」

イリアは、目を開けアルフに見とれた。

「兄貴…カナルは俺から見たら、幸せだったと思うっすよ。なんせ…兄貴の弟なんすから！それに…」

リアゼは、一度言葉を止めた。

にっとうと歯を見せて笑って、

「鎌を残すことで、兄貴の役に立ち、兄貴と一体化できたんすから！」

と。

「そう…なのかもな。」

シュウウ…

アルフの体と鎌から光や、輝きが消えた。

「リアゼと同じ考えってことがすごく嫌だけど、あたしもそう思うよ！だから、元気出してよ、アルフ」

「…そうだな。後悔してばかりでは、カナルに笑われるな。それにカナルは…」

アルフは、じっと自分の鎌を眺めた。

鎌には風神の紋章が新たに刻まれていた。

「ここに居るからな。」

神力庵。

千爺は、畳に正座し自分の鎌を見ていた。

いつもとは、打って変わって真剣な表情。

鎌の刃には、今までの出来事がビデオのように映し出されていた。

「アルフ…これは定めじゃ…乗り越えていくがよい。その果てに…
そなたが探し続けていた答えを見つけられるじやろう。」

コトッ…

千爺は、鎌を横に置き、瞑想の姿勢に入る。

（アルフ…そうすれば知ることができるはずじゃ。ファイアラ家が早死にな理由も…）

「時は…早く過ぎ去り…」

「絆は脆く崩れる…」

「戦いの果てに見えるのは…」

「喜びか…」

「悲しみか…」

「また一つ…」

「存在が消える…」

男が一人、レクイエムを歌っていた。

十二番街、とある家の上。

「それは運命……」

「それは定め……」

「抗えない……」

「絶対のもの……」

「今はただ……」

「安らぎに包まれ……」

「眠れ……………」

仕事に戻るかと、男はすくっと立ち上がり…。

「カナル…アルフを恨んではいかなぜ。運命なんだ…フィアラ家の
なっ…！」

夜の三日月に向かって男は言い放つ。

バサッバサッ…！

月と街灯に照らされ、彼が何者か確認できた。

短い赤髪、黄色い瞳。

そう…シックだった。

謎はまだ…

深まるばかり…

To be continued…

天界バレンタイン大作戦！！

「イリア、はりきってるね！そっか…もうそんな季節だっけ？」

「あれ…？エマ、忘れてたのっ？女の子の決戦の日を…！」

「あはは…忘れてたわけじゃないけどね、好きな人いないから、関係ないかな…って。」

「エマ、美人なのにもったいないな…！あたしはもちろん…」

アルフに想いを伝えるのだっ！

みんな、こんにちは♪

今回は血なまぐさいお話は休憩して、イーリアちゃんのバレンタインを実況しまーす♪

今、あたしは親友のエマと襦で買い物中。

エマはね、白くてサラサラの長い髪で、深緑色の瞳のすごく美人な死神なんだよ。」

だけど、サッパリしてて話し方は男の子っぽいの。」

でも！

その、えーっと…そう！ギャップだっけ？

それがいいみたいで、天界の男の子にモテモテなんだ。」

「イリアはアルフ一筋だもんね。でもさ…すごいよ。」

「んっ？何がすごいのか？」

「だってさ、自分の人間としての命を奪った死神なのに、恨まいでむしろ好きだなんて…。」

エマ、ちょっと羨ましそうな顔したね、今。

なーに、言っただかつ！

あたしはエマの方が羨ましいよっ！！

もちろん、そんなことは口が避けても言わないけどね♪

「あたしは、アルフに一目惚れしちゃったんだもん♪とーっても好みの死神さんに連れてかれるなら、あたしは人生終わっちゃっても、ぜーんぜん構わないって思ったんだよ♪」

「はは…イリアらしいよ。」

エマは微笑んで、あたしの頭にポフツて手を置いた。

「あたしらしいのかな？あつ、ねえねえ、エマ？チョコ作り手伝ってくれないかなっ？」

「いいよ。イリア一人だと心配だしね。…食べれない物作りそうだ

し。」

むっ……」

微妙に当たってるから、言い返せないや」

「あの時よりも上手くなったもん！」

「わかった、わかった。あんまりムキにならないでいいよ。ま、そういうところがイリアの無邪気なかわいさなんだけどね。」

無邪気なかわいさ……？

そっか♪アルフにもやってみようっと♪

「バレンタインも明日だからね。帰ったら、作り始めよっか！」

エマは、バッグをブンッて一回転させて、猛スピードで飛んで行く。

「あ、待ってよー！エマー！！」

置いてけぼりになったあたしも、急いでエマを追いかけた。

イリアの家にて。

「んー…少し甘すぎるんじゃないかな。」

「そうかな？それでも唐辛子5本入れたんだけど？」

あたしとエマは、チョコ作りの真っ最中。

ブラックチョコで、トリュフを作ってるんだよ♪

チョコを固める前の味付け中♪

「じゃ、シシトウも入れたらどう?」

「シシトウ…シシトウ…」

パタン…

ガサゴン…

冷蔵庫の中を探してみたけど…あれ?

シシトウ切らしてるみたいー

「無い？自分、買いに行こうか？」

そう言つて、出かけようとしたエマを、あたしは止めた。

パシッ…て軽く腕を掴んで。

「いゝよ、エマ♪あたしが、買つて来る！あたしが作ってるわけだし…他の買い物思い出したから♪」

「そつ…？」

「だから、エマはここで留守番お願いねっ♪行つてきまーす♪」

フワッ…

バサッバサッ…

あたしは勢いよく飛び出して、街へ直行だっ♪

天界のバレンタインは変わってる。

あたしも初めて聞いた時は、うつそー！？て叫んじゃった！

何が変わってるのかって？

天界では…バレンタインチョコは、辛ければ辛いほど、苦ければ苦いほど、相手を想っていることになるんだって！

なんで？って聞いたら、『恋はそんなに甘くないのよ』って意味だ
って！

よくわかんないけど…あたしのアルフへの気持ちは重いから、とび
つきり辛くすればいいのかもっ♪

「たっ だいまゝ」

「おかえり、イリア。シイトウは、ちゃんと買ってきて来た？お母さん、心配したよ。」

「むー！子供扱いしないでよ、エマ！それ・に」エマはお母さんじゃないじゃん」

「冗談だよ、冗談。イリアはやっぱり可愛いね。自分が男の子だったら、彼女にしたいぐらいだよ。」

エマに苦笑されて、おまけに頭撫でられた。

エマのこういうおどけたところ、大好きだなあ」

あつ、アルフの方がもっと好きだけどね」

「さっ、もう一息だよ！イリア、頑張ろう！」

「うん！」

あたしは買ってきたばかりのシトウを、十本まとめてすりつぶした。

そして、チョコにドバドバって一気に入れた。

パクッ。

エマが味見する。

「もう少し、塩コショウ入れてみよっか。」

「塩コショウだねっ」

パッパッ！

「…生姜汁が足りない。」

「生姜汁だねっ♪」

タプタプッ…

「お酢！」

…とまあ、こんな感じで、二時間かけてチョコ完成♪

仕上げるに…

「『大好きっ♪イリアより』完成っ♪」

ホワイトチョコに気持ちを込めたら、出来上がり！

「ふー。できたね、イリア。」

「うん♪明日、アルフに渡す…うー」なんか緊張してきたよ！」

「大丈夫、大丈夫！これだけ頑張ったんだから、アルフも喜ぶはずだよ。」

えへ…♪そうだといいなあ♪

エマが帰って、寝る直前。

あたしは、チョコにピンクのリボンと青い箱でチョコをラッピングした。

アルフ…待っててね♪

明日…あたしの気持ちを…

すう…

夜が更け、決戦の朝が来た。

バレンタイン当日。

いよいよ来たよー！

女の子の決戦の日が♪

いつもより濃いめにメイクして…

髪の毛、二つ結び！

バレンタインはお仕事お休みだから、お気に入りの服着て…

ちょっとコロンつきたりなんかしちゃって…

よっし！

行ってきましたーす♪

あたしは、ラッピングしたチョコを抱えて、アルフを探しに中央広場へ！

中央広場は、暇な人とかがお話し合う広場♪

仕事が無い日は、アルフは大抵ここに居るんだ♪

キョロキョロ…

辺りを見回してみた。

「よっ、ストーカー娘！また、兄貴を探してんのか？」

後ろからリアゼが話しかけてきた。

またストーカー言う…

いい加減に…

「しろっつの!!」

ドカドカッ!

リアゼの背中の中を思いきり蹴った。

「痛っ!主語入れるよなっ…」ストーカーな上に暴力むす…」

「こんな日にあんたなんか会いたくないっての!!」

ドカドカッ!

あたしは、さっきと同じ位置にもっと強く蹴りを入れた。

「痛え……俺が何したってんだよ!？」

リアゼのやつ、そっちからケンカ仕掛けたのに、被害者ぶってるからものすごく頭にきた。

「あんたは邪魔なのっ!!あたしは、アルフに用事あるんだから……」

「私に用事かい?イリア。」

あっ……アルフだっ

いつものクールな表情で、リアゼの隣まで歩いて来てくれた。

やっぱ……優しい……カッコいいっ

はあ……素敵……。

「…イリア？」

はっ！？

いけない、いけない！

大事な用事、忘れるとこだった！

「あ、あのね、アルフ！今日って何の日か知って…」

「兄貴！こいつ、俺が何もしていないのに蹴り入れてくるんすよ！
どうにかしてほしいす！」

な、何言ってくれちゃってんの、あんた！？

アルフの前なのに…！

「違うのっ！アルフ…聞いて…」

ふうって、アルフにため息つかれた…最悪…。

「イリア、理由無くケンカするのはどうかと思う」なるべく、蹴ったりするのは控えめにな。」

アルフはそう呆れ気味に言って、あたしの頭をよしよしとなでた。

何もなかったら嬉しいけど…今のあたしにとって、なでなでは…

「ふえっ…アルフ…。」

「な、何泣いてんだよ、おまえ！」

あんたのせいだっ！！

心声をぐつと抑えた。

「イリア…？」

アルフが不思議そうな顔で見つめてる。

「あたし…あたし…ただ…」

ダメだ…泣けてきたよお…。

「これ…渡したかっただけ…!!」

もう限界…

ダッ！

「イリア…!」

「おい、ストーカー娘！俺が悪かつ…」

アルフとあいつの声、遠くなっちゃった…。

あたしは一度も振り返らず、家に帰った。

すぐに思いきり泣いた。

「ふえっ…リアゼの大バカ!! アルフに…嫌われたかも…」

渡された箱は、きれいにラッピングされていた。

イリア…

『今日は何の日？』か…。

今日は確か…

「兄貴…俺…謝るべきっすかね？」

リアゼが困り顔で話かけてきた。

「何か悪いことをしたのかい、リアゼ。」

「よくわかんないっすけど…兄貴の前で悪口言っただけかなと思っただけから。」

いや、悪いのはリアゼだけではない…

私もだ。

なだめるつもりが…傷つけてしまったようだからな…。

「私も…謝りに行くべきかもしれないな。」

「兄貴は、何もしてないっす！けど…謝りに行くなら、別々に行った方がいいかと。だから、俺…先に謝ってくるっすね！」

そう告げて、リアゼはイリアの家の方に向かって行く。

バサッ…

バサッ…。

リアゼの言うことも一理あるな。

戻って来たら、入れ替わりで行くかな…。

そうだ…今日は…。

パラッ…

私はラッピングのリボンを外し…

パカッ…

箱を開けた。

中には、トリュフチョコが入っていた。

一つのカップに三個ずつ…

合計九個入っていた。

「バレンタインデーだったな…。すっかり忘れていた…。」

ヒョイ。

一つ摘み上げてみる。

少しデコボコしているが、ちゃんとトリュフの形をしている。

粉がかかりすぎていて、箱にパラパラと降りかかる。

こういうところに、イリアらしさを感じるな。

「イリア…お詫びと共に礼も言いに行くからな…。」

パクッ…

やはり…辛いな！

一日一個が限界だ。

リアゼは上手く謝れただろうか…？

そんなことを考えながら、私は二つ目のチョコを手にした…。

あーあ…なんで俺、大嫌いなあいつに謝ろうとしてんだろっ？

まさか、泣くとは思わなかったぜ！

そんなに兄貴の前で、いい子になりたいのかよ？

つつか、ストーカーは言い過ぎってか？

じゃあ、何って呼びやいいんだよ！

名前で呼んだら、『気安く呼ばないでよ！』って言われるのがオチ
だろっし…

はあ…困ったぜ！

なんてこと考えてたら、もうあいつの家だ！

天界地図見ながら来たから、間違いねえよな……」

……。

ピンクだよな」

ストーカー娘らしいつか、何っつか……

ドーム形の赤い屋根で、壁はピンク。

ドアに、『イリアの家』お客様は、嫌いな人以外、大歓迎♪
て札がかかっている。

嫌いな人以外、大歓迎？

俺は歓迎されなさそうだぜ」

ピンポーン♪

一応、チャイムを押してみる。

……

……

……

……

…居ないのかよ？

「おい！ストーカー…いや、ピンク娘ー！！居たら返事しろー！！」

俺は、ありったけの大声で家の中に呼びかけてみた。

……。

数秒して、返事が返ってきた。

「居るけど…札見なかったの！？今すぐ帰ってよ！！」

嫌われてるようだぜ！

予想はしてたけど…なんか傷ついた！

こうなったら、維持だぜ！

「話がある！！」

「あたしは話したくないし、入って来て欲しくないの！！」

「じゃあ、そこで聞いてるよ！！」

……。

静かになった。

たくっ…仕方ねえな。

まだかすれ声だから泣いてるみてえだし…

とつと終わらせて、兄貴にバトンタッチするか！

すう…

深呼吸して、思い切って話しかけた。

「俺が悪かった！！ストーカーは、言い過ぎたと思ってるぜ…。だから、謝っとく！俺だって男だし…踏ん切りつけねえとって思ったからな。」

……。

返事は返って来ない、か！

「大嫌いな俺に言われても嬉しくねえだろうけど…兄貴の前でのピ
ンク娘は、女の子らしくて豆粒ぐらい少し好きだかな！！」

…って、もう何言ってるんだかわかんなくなってきたぜ！

俺…考えて物言つの苦手なんだよなー！

あ、それに肝心なこと言ってるねえや！

「お詫びつつか…まあ…その…あれだ！とにかく、置いてくからい
らなかったら捨てるよ…」

俺は、ドアの前に一つ箱を置いた。

中身は…

すぐに捨てられるからいつか」

「そ、そうことだから、じゃあな……」

バサッ……

バサッ……

兄貴がお待ちかねだ。

俺は大急ぎで元来た方向へ戻った……。

なによ…あいつ！

意味わかなさすぎっつの！

ポフッ！！

あたしは、愛用の枕を壁に投げつけた。

でも…何置いてったんだろう？

気になる…

好奇心には勝てないなあ…

「ぐすつ…」

あたしは、ハンカチで涙を拭きながら、ドアを開けた。

カチャ…

ドアの前のところに、箱があった。

何、これ…？

白い箱に赤いリボンなんて…

プレゼントみたいじゃん！

あっ！

もしかして、開けると爆発するトラップだったりして…！

本当に気になる…

あたしは、おそろおそろ箱を手にとった。

カサカサッ…

振るとそんな音がした。

カサカサッ…？

トラップじゃないみたいだね！

じゃあ、何くれたんだろう…あいつ…。

シュルシュル…

リボンを解く。

パカッ
…！

箱を開けた。

中身は…

「…バツカじゃないの、リアゼの奴し」

思わず呟いちゃった。

「兄貴！交代っす！」

パン！

リアゼとハイタッチというものをして、私はイリアの家へ。

バサッ…

バサッ…

………ここか。

んっ…？

ドアが開けっ放しで不用心だな！

「イリア！入っていいか？」

玄関から呼びかける。

「ア、アルフ！？ひ、ひよっと…待つへ…」

「……………？！わかった。」

食事中的ようだな！

ちょうどおやつ時間だからか？

ドタドタッ！

イリアは、ハアハア息をつきながら、廊下を走って来た。

「どしたの？」

イリアは、きょとした顔で聞いた。

泣き止んだようで、安心した。

「いや…頭をなでたことで、イリアを傷つけたと感じたから、謝りに来たのだよ。」

「あ、そのことか！気にしないでいいよっ」アルフは、なーにも悪いことしてないんだからっ」

「しかし…」

「あ、そーだ、アルフっ」チョコ食べてくれた？美味しかった？」

イリアは、にこっと笑った。

さて…何と答えようか」

私は、本来甘党だから辛いチョコは、正直言つと美味しいとは感じない。

だが、不味いとは口が裂けても言えない…。

頑張つて作ってくれたのを感じるからな。

「…美味しかった。来年からは、もう少し辛さを控えめにしてくれると助かるのだけれど。」

「そつかゝゝ上手く作れたなら、良かったゝ来年も楽しみにしててね、アルフゝ」

来年…

「下界の味のチョコ…リクエストしていいかい？」

遠回しに、甘いチョコを希望しておいた。

しっかし…見かけ悪すぎだろ！

これがトリュフつつうのは、正直納得いかねえ。

俺が作り直してやりたいぐれえだよ！

兄貴がチョコ苦手つつうから、一つだけもらったんだけれど…

あまり食べる気起きねえな！

トリュフチョコを、手の平でコロコロと転がす。

…手が粉だらけになった。

つけすぎだろ、粉っ！

心の中で突っ込む。

まあ、形は微妙でもチョコはチョコだよな。

パクッ…

口に入れて、チョコを噛んだ瞬間、

「か、辛えええ!!」

俺は、叫びながら座り込んでしまった…。

「はい、大嫌いなシークへ、甘い甘いチョコプレゼント。」

「新手のいじめかよ」でも…受け取っとくぜ。毎年毎年感謝する。」

はは…シークったら、照れてそっぽ向いてるよ。

「ホワイトデーに倍返しで、頼むよ。」

「はあっ！？おまえ…！そういう魂胆かよ！…わかってるけどな、毎年毎年同じこと言われてりゃ。」

「わかってるなら、話は早い。じゃ、そついうことで…また。」

「おう、またな。」

バサバサッ…！！

自分は、イリアの家を目指した。

上手くいったかどうか、聞いて来ないといけないからね。

失敗してたら、自分も連帯責任だし。

よくよく考えたら、迷惑なイベントにしたもんだよ…天界の規則委員会はい

男死神にとって、最悪だね、大好きな女性に辛いチョコもらうなんて。

だから、あんまり盛り上がらないんだよ、天界のバレンタインは…い

「あ、エマ〜!」

極上の笑みを浮かべたイリアと、いつもと同じ表情のアルフが見えた。

天界の生活に慣れて来た彼らも…

ふと思い出すことがある…

人間だった頃を…

t o b e c o n t i n u e d . . .

おまけ

次の日…。

「かつたりいけど、仕事行くか！」

「あーリアゼ、話があるから待ちなさい！」

ドカツ！

広場から飛び立とうとしていたリアゼは、イリアに背中を強く蹴られた。

「のわっ！？」

ドテッ！！

豪快に前のめりに転ぶリアゼ。

「いってえ…」なんだよ、ピンク娘…」

「あんた、ばつかじゃないのっ！？バレンタインデーは、女の子が男の子にチョコ渡す日なんだよ？それも、好きな男の子に！」

イリアは、リアゼの前に来て早口で言った。

「はあ？それが何だってんだよ？」

リアゼは、バカ力女…と心で呟きつつ起き上がる。

「だーから！昨日がそのバレンタインデー！なんで、あたしあんたからチョコもらわないといけないのかって、聞いているの！」

「知らなかったし、別にそういうつもりじゃなかったから、誤解す

んなよー」

「誤解はしてないっ！けど…チョコは甘くて美味しかったから、お礼言っただけだよっ」

イリアは微笑んだ。

「そ、そうか？美味しいなら、俺が食べたかったぜ…」

「そういうことで…バイバイっ」

ドカツ！！

イリアは、リアゼを雲の下に向かって蹴飛ばす。

「へっ？まだ翼広げてなっ…うあああっ……」

リアゼの悲痛の叫びはだんだん小さくなり…

やがて聞こえなくなったとさ。

死神になった日…

パーン！

一発の乾いた銃声。

彼女の瞳には、全てがスローモーションのように映った。

撃った中年男性は、

「空砲のはずだったのに…くっ…つかまってたまるか！」

銃を持つ両腕を震わせ、真っ青な顔で逃亡した。

撃たれた青年は

「……………」

左腕から多量の出血を帯びながら、声もなく地面に伏した。

ドッ！

鈍い強打音が聞こえ、青年は微動だにしなくなった。

ただ傍観していた彼女も、その音でハッと我に返る。

そうして、倒れた青年に一步步ゆっくりと歩み寄る。

カッーン…

カッーン…

カッーン…

カッーン…

ハイヒールの足音が響いた。

カッーン…

目を固くつぶり動かない青年に、彼女は恐る恐る声をかける。

「アルフ…？」

「……………」

青年からの返事はなかった。

急所を撃たれたようで、青年の血は止め止めもなく、勢いよく地面を染めていく。

耳を口に近づけても呼吸がなく…

腕を手で掴んでも脈が無いことを確認した彼女の瞳から大粒の涙があふれ出し…

「いや…いやよ…いやー！！！！！！」

悲痛な叫び声が、夜間のため無人な駐車場にこだました…。

.....

.....

.....

.....

.....

「...っ。ここは...一体...?」

アルフはゆっくりと起き上がり、周りを見渡した。

真っ白な世界...

自分以外に何も見えない世界...

地面は、ゴムボールのように弾力性に富み、綿のようにふわふわした触り心地であった。

(私は...確か...撃たれて...体が痺れて...意識が消えて...それから...?)

ぼんやりとした脳を必死で働かせてみる。

だが、今の状況を完全に理解するのは不可能に近かった。

「とにかく…」

彼は呟き、歩き始めた。

どこに向かっていいのかわからないが、とりあえず前へ。

トタッ…

トタッ…

トタッ…

どのくらい歩いただろうか？

永遠に続くかに思われた白い世界から抜け出し、
灼熱のマグマが見える場所にたどり着いた。

ただ赤い赤い世界…。

上も下も前も後ろも、見渡しす限り真っ赤。

マグマからの熱気が、アルフに汗を流させる。

（熱い……。もしかすると、こういう場所を地獄というのかもしれない。）

「ふっ……。」

よくわからない笑いがこみ上げ、アルフは口元だけでそつと笑った。

すると、それに反応したかのように

「ようやく来たか、アルフレッド・フィアラ。」

声が聞こえた。

太く低い男性の声だった。

「……………」

バツ！

アルフは反射的に身構え、声の主を目で探す。

「そう身構えんでも、わしゃ何もせぬよ。」

声が少し近づいて、アルフは耳を澄ませる。

……………。

…どつちら、マグマの中から響き渡っているようだ。

アルフは、マグマの底を覗いてみた。

コポコポ…

マグマが湯気を上げながら、煮えたぎっている。

そのマグマのすぐ上に、鬼のような形相をした男が一人浮いていた。

浮いて…？

「ほっほ。ちよいと待っておれ！」

男はアルフを見上げ、愉快そうに言った。

そして、何やら呪文のような言葉を唱えた。

シュン！

「くっ…!？」

マグマから強風が吹き出し、男は一瞬にして、アルフの背後に着地していた。

ガバッ！

アルフは振り向き、警戒の眼差しを男に向ける。

「あんた…誰だ？」

男は首にひも付きの黒い帳簿をかけていた。

右手には、さすまた。

頭に兜のようなものを被り、そこから牛のような鋭い角が生えていた。

歯は吸血鬼のように尖り、頑丈そうな赤い鎧を着ていた。

顎から胸にかけて、黒くふさふさの髭がたくわえられ、左手でその髭を撫でていた。

「ふむ…わしに『あんた』と言えた者は数少ない。なかなか度胸があるようじゃのう…ほっほ。」

「……………?」

アルフは身構えたまま、怪訝そうに眉をひそめた。

「あー、こほん！アルフレッド・フィアラ。おまえは、ここがどこじゃかわかるかの?」

「…敢えて言うなら、地獄とかいうやつかな。」

「そうじゃな。敢えて言わなくても、地獄。正確には広い天界の一角に過ぎんのじゃがな。」

「…そのことから推測してみれば、さしずめあんたは閻魔というこ

とになるな。」

腕を組み、男をにらむアルフ。

齒は吸血鬼のように尖り、頑丈そうな赤い鎧を着ていた。

顎から胸にかけて、黒くふさふさの髭がたくわえられ、左手でその髭を撫でていた。

「ふむ…わしに『あんた』と言えた者は数少ない。なかなか度胸があるようじゃのう…ほっほ。」

「……………」

アルフは身構えたまま、怪訝そうに眉をひそめた。

「あー、こほん！アルフレッド・フィアラ。おまえは、ここがどこじゃかわかるかの？」

「…敢えて言うなら、地獄とかいうやつかな。」

「そうじゃな。敢えて言わなくても、地獄。正確には広い天界の中
の一角に過ぎんのじゃがな。」

「…そのことから推測してみれば、さしずめあんたは閻魔というこ
とになるな。」

腕を組み、男をにらむアルフ。

男は特に気を悪くした態は無い。

むしろ、喜んでいるようですらあった。

「ほっほう！なかなか順応性があるようじゃな。そう、わしはこの
地獄を取り仕切る閻魔じゃ。」

「…私は死んだということか。」

アルフは何の感情も込めずに言った。

「確かにおまえは死んだ。あくまで、“人間としてのおまえは”じやがな。」

「どづいつことだ…？」

「あー、こほん！アルフレッド、今からわしの言つことをよく聞くのじゃ。いいかの？」

「…ああ。」

やや警戒も解けたアルフは、端的に答える。

「アルフレッド。おまえは、神を信じるかの？」

「…神が本当に居るのならば、私の家族は生きていたと思う。だから、神は信じない。」

アルフは、棒読みに答えた。

「では…」

と、閻魔は改まる。

「死神は信じるかの？」

「死神……？神よりかは信じるな。」

「そうか、そうか！それならば、話は早いのだ。アルフレッド、人間としての生は望めないが、死神として生きてみらんかの？」

「死神として……？」

「そう、死神として、じゃ。」

閻魔が言葉を繰り返した。

「……………」

「アルフレッド、すぐには答えは出せぬじゃろうから、1日待とう。」

よく考えて、決めるのじゃよ?」

「…わかった。しかし、仕事内容などについて聞きたい。」

アルフは、真剣な目つきで閻魔を見つめた。

（興味は持ったようじゃの…。まあ、どちらにせよ、定めじゃから
答えは一つしかないのじゃがな…。）

閻魔は心の中で呟く。

「仕事は、至って簡単なことじゃ。寿命の尽きた人間を迎えに行く。
ただ、それだけじゃ。」

「人間界の話では、死神は人を殺すのが仕事と聞いたが…?」

「あれは、人間共の勝手なイメージじゃよ。全く…けしからんのう
!」

ドンッ！

閻魔は、肩をいからせ、右足を踏み鳴らした。

「それで…寿命の尽きた人間かそうでないかは、どうやってわかる？」

「ほっほう！実に良い質問じゃの。」

（誰でも気になることだと思うが…。）

アルフは、閻魔の感心ぶりに少し呆れ気味だった。

閻魔は、気分を良くしたのか、その形相には不釣り合いな笑みを浮かべる。

「寿命の炎というものがあるのは、知っておるかの？」

「寿命の炎…？」

「人間には見えぬのじゃが、天界の者には見える炎じゃ。生きた人間の胸には…青白い炎が映る。寿命の尽きた人間は、その炎が消えている。」

「そうなのか…」

納得したように呟くアルフ。

「他に質問はあるかの？」

「…迎えに行くとは、具体的にはどうすればよいのか？」

「ふむ…人間の一般イメージで、死神は鎌を持っていると考えられておるじやろ？正にその通り。」

シュン…

閻魔が手を前に差し出すと、大鎌が現れた。

「鎌は死神一人一人に合わせた、オリジナルの鎌じゃ。普通はこのタイプじゃがな。ほれっ！」

ヒュッ…

パシッ！

柄の部分を掴んで、鎌をしっかり受け止めるアルフ。

アルフは鎌をじっくりと観察した。

…いかにも死神という感じの大鎌。

思ったより軽く、シンプルな造りだった。

「無論、小鎌もあるわけじゃし、二刀流もある。死神になった者に

は、わしからプレゼントしておるのじゃよ。」

「ふうん…？」

シュツ…

大鎌は、吸い付けられるように閻魔の手に戻る。

「他には、あるかの？」

「いや…特には無い。」

「ならば、少し散歩をして来るがよい。あちら側には、襠と呼ばれる場所がある。下界での、街と同じように店があるぞい。」

閻魔は自分から見て左を指差した。

「向こうには、中央広場がある。暇な死神達が時間を潰す場所じゃ。」

向かって、後ろ側を指差す閻魔。

「あちらは、住宅街。こちらは、相談所がある。」

前と右側を指差す。

「では、わしは仕事をせねばなんから、失礼するぞい。」

閻魔はそう言い残し、マグマの底へ戻っていった…。

（マグマの底で仕事…？閻魔の仕事は、天国か地獄か行き先を決めることだと思っていたから、意外だな。）

一人になったアルフは、そんなことを考えながら中央広場の方角へ歩き出した。

タッ…

タ
ッ
…

タ
ッ
…

中央広場は、広場という割には目立つ物がなかった。

雲でできたイスがいくつかあるだけ。

（広場というより、空き地だな。）

アルフはそう断定した。

誰か居ないのかとアルフが辺りを見回していると。

「あーあ、今日も疲れたなあ。」

遠くから声がした。

声の主は、だんだん近づいてくる内にアルフに気づき、『あー！』

と声を上げた。

「なーんだ、アルフも死んじゃったのかよ！」

サファイアブルーの髪 of 死神が残念そうに言った。

瞳は茶色に近いオレンジ色。

（カナルも死神になったのか！）

アルフは一瞬目を見開いて驚いたが、すぐに冷静な顔つきになる。

「カナル…。まさか、本当に天界があるとはな。」

「あつたり前さ！俺も初めは驚いたけど、慣れって怖いものだ。」

「慣れ、か…。」

「全く…フィアラ家は早死の家庭なんだろうな。まあ、それはよしとして…」

意味ありげににっと笑うカナル。

「アルフ、これからは兄弟仲良く死神やろう！それで、俺とアルフは天界一凄腕死神コンビになるんだ！」

「天界一の死神コンビ…？」

「そうさ！やろうぜ、アルフ！そりゃ突然死んじゃってさ、まだ気持ちの整理がつかないだろうけど…。俺、さみしかったしな。アルフはたった一人の肉親だから、一緒に居たいって思いがあるんだ。死神ライフも悪くないぜ！」

（死神…か。カナルに会ったのも何かの縁。私は死神として生きるべき定めかもしれないな。）

アルフは数秒置いて…

「…そうだな。何にしろ、過去も人間としての生活も取り戻せない。一人でやっていくつもりだったが…兄弟で天界一を目指すのも悪くないな。」

「んじゃ、改めてよろしくな、アルフ…いや兄さん！」

「ああ。」

差し伸べられた弟の手を、アルフはしっかりと握った。

「じゃ、俺はこれから仕事だから、行くぜ？死神になったら、また会いに来てくれよなっ！」

「ああ…そうするか。」

バツ…

カナルは黒い翼を広げ…

「またな、アルフ！」

バサバサッ！

下界へと飛び立っていった…。

（まさか、カナルにまた会えるとはな…。悪くはない気分だが…）

カナルの後ろ姿を見送り、アルフは複雑な気分になっていた。

死んだ弟に再び出会えたことは嬉しいが、その反面自分の死を確認したような気がしたからだ。

…しかし、メルディのことが気にかかる。

「メルディ…」

雲の地面を見ながら、淋しげにアルフは呟いた。

次にアルフは襠を訪れた。

「鎌を修理するなら、うちが一番だよー！ーさあ、遠慮なく寄りな
されー！」

「新発売のグレイプフルーツパフェ！あなたはもう食べた？まだなら、今すぐ味を確認しちゃおう！」

「さあ、寄ってらっしゃい、見てらっしゃい！野菜、香辛料、お菓子…何でもあるお店だよー！！」

ガヤガヤガヤガヤ。

店は大賑わいだった。

閻魔の説明通り、襦は街と似ている…。

そうアルフは感じた。

次にアルフは住宅街を訪れる。

一戸建て…

庭付き…

二階建て…

マンション…

アパート…。

実に様々な住宅が立ち並んでいる。

「あら、奥さん。仕事の調子はいかがですか？私は、ノルマ達成ギリギリで困ってますの。」

「そうねえ…私も似たようなものかしら。」

路地は、世間話や雑談をし合う婦女、ボールなどで遊ぶ子供、上空を徘徊している中年男性などで埋め尽くされている。

特に用事もなかったので、アルフはパツと見ただけで住宅街を後にした。

来た瞬間に胸に押し付けられた『住宅情報』を手にして…。

最後に相談所を訪れる。

五階立ての白い縦長の建物。

入り口に『死神相談所』と赤い字で大きく書かれている。

透き通った自動ドアには、相談にのる内容の紙が貼り付けられている。

『人間関係、仕事、下界の記憶、恋…どんな相談にものります。営業時間は、天界時間で6時～20時。』

「……………」

アルフはそこまで読むと、

（私には、あまり関係ない場所だな。）

そう悟り、相談所を後にした。

「閻魔…！居ないのか？」

アルフは自問自答するように言った。

閻魔に紹介された場所は一通り回り、アルフの心は決まっていた。

1日と待たず、今すぐそのことを伝えようと思つのである。

「わしを呼び捨てとは…。アルフレッド、おまえはいつか罰が当たるぞい。」

ゴポゴポ…

マグマから気泡が出てきて、閻魔が姿を見せた。

最近の若い者は口の聞き方がなつとらんからのう、などと愚痴りながら、

シュッ！

アルフの目の前に瞬間移動した。

「…マグマの中で、いつも何してるのかい？」

「まさか、それを聞くためにわしを呼んだのか？…そうだとしたら、わしは怒るぞい。この忙しい時に…ぶつぶつ…」

「違う。それは余談だ。そうではなくて、私があんたを呼んだ理由は、私の決心を伝えに来たからだ。」

アルフは端的に言った。

瞳はしっかりと閻魔を見据えながら。

閻魔は目を輝かせた。

「早いもの。そして…決心とは、死神になることに対してじゃろ？」

「ああ。しかしその前に…一つ質問がある。」

「質問とは、何じゃい？」

一度まばたきをし、アルフは尋ねる。

「死神として生きていけば…私の知りたい答えが見つかるだろうか？」

「……………そうじゃな。わしからそれを答えることはできんが、見つかる可能性は高いじゃろうのう。」

「わかった…。死神になるための手続きを頼みたい。」

閻魔は待つてましたとばかりに、パンツと手を打ち鳴らす。

すると…

ふわっ…。

アルフの肩に黒いフードコートがかけられた。

「それが死神の服じゃ。次は…」

パンツ！

また手を打ち鳴らす。

バサッ！

「……………！？」

アルフは、パチパチとまばたきをし、驚きの表情を見せた。

それもそのはずで、アルフの背中に黒い翼が生えたからだ。

自分の腕の長さぐらいの大きさの翼…。

「ほっほっ！なかなか似合っではないか！最後のプレゼントはこれじゃー！」

パンッ！

シュン…

アルフの手に、黒い大鎌が携えられた。

「本格的だな…。そういえば…鎌は個人に合わせた鎌にできるのか？それとも、あんたが勝手に合わせるのか。」

「…その口調が和らげば、良き死神と思えるのじゃが…。」

閻魔は、額に手を当て、ふうとため息。

「どちらでも可能じゃが…本人の希望をかなえた上で、わしが最後に仕上げるのじゃ。」

「ふうん…？」

「何かつきたい能力でもあるかの？」

「……………」

アルフは目を伏せ少し考えた。

（能力、か…。）

「……………」

「思い付かぬならば、わしが考えよう。こんな能力はどうかの？」

パアッ…

閻魔が鎌に手をかざすと、水色の煙が鎌を覆い…、それはすぐに消えた。

「何も変わってないように見えるが…？」

鎌を高々と掲げ、怪訝そうに眉間にしわをよせるアルフ。

「外見は、変わってないぞい。中身が変わったのじゃ。」

「一体どんな能力が付いたんだ…？」

閻魔は、ほっほと例の特徴的な笑い声を上げた。

「他の死神の神力を吸収し、自らの神力を上げる能力を付けた。」

「ジンリキ…？」

「ふむ、“神力”と書いて、“神力”。死神と死神が戦う場合においては、神力が高い者が優位な立場に立てる。アルフレッド…おまえは、過酷な運命を背負いし者じゃ。じゃから、その能力はいずれ役立つと、わしは判断した。」

「そうなのか…」

アルフは、半信半疑と言いたげな視線を送っていた。

「では…」

そんなアルフの視線を気にせず、閻魔は言う。

「初仕事に行ってもらうかのう。最初じゃから、指定しよう。ターゲットは…コルクドウル区に住むメルディアン・イーグル。」

「メルディアン・イーグル…!？」

「そうじゃ。通称メルディと呼ばれている女性じゃ。」

閻魔は、おかしな奴じゃのうと首を傾げていた。

(メルディ…を迎えに…)

アルフの心で葛藤が生まれる。

(死神として生きることを決めた…。ならば、私情に惑わされてはならないはず…。しかし…)

「…ターゲットは変えられないのか？」

「無理な相談じゃ。」

即答する閻魔。

「…っ」

ギュッと拳をにぎりしめるアルフ。

「どうかしたかの？」

「いや…迎えということは、彼女は死ぬということか？」

「当たり前じゃろ。」

「…わかった。」

アルフは、ようやく承知し…

「ノルマをこなせば、報酬もあるからしっかり働くように。さあ…行くがよい！」

バサッ…

新人死神の彼は、下界を目指して飛び立つのだった…。

悲しみと憂いの表情を浮かべ…

ゆっくりゆっくり…

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

少年の夢

「……………様……………神様……………死神様……………」

ドアを閉め切り、電気も点けず少年はぶつぶつ呟いていた。

虚ろな瞳で、窓の外を眺め…。

「死神様…おいで下さい…」

ガッツ！

右手に持っていたナイフで、一枚のタロットカードを刺す。

タロットカードに描かていたのは、DEATH…

おどろおどろしい死神だった…。

ケルジャヌ区五番街。

『街を清潔に保とう!』、『豊かな自然を残そう!』などと書かれた看板が至る所にある。

道端には、赤や黄色、黄緑や青。

実に様々な色や種類の花が咲き乱れ、歩道のほとんどが並木道。

看板効果か、道路にはガムの包み紙一枚すら落ちていない。

人々の顔はほがらかで、明るい笑い声があちらこちらから聞こえてくる。

（美しい街だな…）

アルフは、その街で一番高いと言われているビルの屋上から、街を眺めていた。

サーッ…

やわらかな陽射しの中、微かに風がアルフの髪を揺らす。

今回の彼のターゲットは、この街に住む10歳の少年。

（いつまでもこうしていたい、行かなくてな。）

名残惜しそうにゆっくり翼を起こす。

そして、

バサ…バサッ…!!

目的地へと飛び去るのだった…。

パサッ…。

パサッ…。

（ここだな。）

目的の家の屋根に降り立つアルフ。

黄緑色の屋根に、薄いオレンジ色の壁。

ようやく人一人通れるぐらいの広さしかない庭に、犬小屋が一つ。

犬は眠っているようだが、アルフの位置からは犬の姿は確認できない。

扉は両開き。不用心なようで、わずかに隙間が開いている。

家の住人は見当たらない。

隣の家とも、100メートルほど離れており、正面には大木が植えられた空き地がある。

（さて…どんなターゲットなのやら…）

ターゲット指定の場合、年齢・性別・所在地しか伝えられない。

アルフはスツと二階の窓の前へ移動。

バサバサ…

翼を羽ばたかせながら、中を覗く。

しかし…

「…中に入るより他ないな。」

暗幕のように真っ黒なカーテンで覆われた室内の様子は、外からではわからない。

（引きこもりなのか…クールな少年なのか…）

めったに人に興味を持たないアルフも、少し気になる様子だった。

（とりあえず…部屋に入らないことには、話が進まない。）

スッ…

アルフは肩にかけた鎌を手を持つ。

（カナル…力を借りるぞ。）

ヒュッ！

思い切り鎌を振る。

ビュー…！！

台風のような激しい風が吹き荒れた。

その風は、窓を突き抜け、部屋まで入り込む。

ヒュオオ…

「わっ！？」

中から驚き声が聞こえた。

声変わりする前の少年の高い声。

ガラッ！

それからすぐに暗幕と窓が開けられた。

少年と目が合った。

短いくせ毛だらけの茶髪。

黒い大きめの瞳。

緑色の半袖Ｔシャツに青色の長ズボンをはき、いかにも歳相応の少年だった。

きょとんとした表情でアルフを見つめている。

「黒い翼に…フードコート…大鎌…もしかして…あなたは死神？」

開口一番、少年はアルフに聞いた。

「そう、私はアルフ。あんたを迎えに来た死神だ。」

別に隠す様子もなく、平然と言つてのけるアルフ。

「あんたは、もうすぐ死ぬ。何か望みは…」

「やったー！本物の死神様だ！」

「なっ…。」

喜びの声で言葉を妨げられ、アルフは拍子抜けした。

対称的に、少年は目をきらきら輝かせ、拳げ句にはガッツポーズまでしている。

（死神と聞けば大抵の人間は怯えるが…珍しい反応だな。）

「迎えの意味がわかっていのか？あんたは死ぬということ…」

「僕はレリック。憧れている死神さんに会えて、今ものすごく感動
！！」

「…人の話、聞いているか？」

「もちろん！僕はいつでも覚悟できてるよ。人間としての人生を終わらせて、弟子にしてほしい！」

レリックは、嘆願するようにかなりの大声で言った。

「……………」

アルフは困惑気味だった。

（変わった人間もいるものだ…。自ら、死を…死神になることを望むなど。）

「…本当に良いのか？死神の仕事は楽ではない。それに残酷極まりなく、過酷で決断していいものではないぞ？」

そう脅しつつ、アルフは鎌の刃先をレリックに向けた。

いつものように、冷たい表情で。

しかし、レリックは全くひるまない。

「大変なのはわかってるよ？ だけど、僕は…どうしても死神になりたい。夢見てた死神に…」

「夢見てた…？」

トッ…。

鎌を肩にかけ直すアルフ。

別段急ぐ仕事ではなかったから、話を聞いてからでも、遅くないと思っただけだ。

「うん。」

「なぜ死神になりたいんだ？」

単刀直入にアルフはレリックに尋ねた。

レリックは、にっこり笑って答える。

「だって、死神って不死身だし、かつこいいし……」

「それだけで死神になりたいというならば、あんたは死神にはなれないな。」

冷たく言い放ち、レリックから顔を背けるアルフ。

「それだけじゃないです！僕は死神になりたい理由は……」

「理由は？」

「……ちよつと待ってて。」

レリックは、机の引き出しを、何やらガサゴソと探し始めた。

「えっと…あつた!」

目的の物を見つけたようで、小走りにアルフの前へ戻って来る。

「これが…僕の理由だよ!」

そう言つて、レリックが差し出したのは一枚のタロットカード。

真ん中に何かが刺さつたような亀裂のあるDEATHのカード。

「……………?どつという意味かわからないんだが。」

「…僕は、タロットカードで占いをするのが趣味なんだ。でもね…不思議なんだよ。」

レリックは、DEATHのカードを愛しいもののように胸に当てる。

（あんたの行動の方が不思議な気がするが…？）

アルフはレリックに視線を戻す。

「僕自身を占うと、絶対にこのカードが出てくるんだ。まるで…そう。まるで、僕に死神になれると言っているかのよう。」

「偶然、ではないのか？」

「違うよ！何回やっても日を変えてもこのカードしか出ないんだから。」

レリックは、ムキになって否定した。

「なる、ならないかは、あんたの自由だが、そのためには死を受けなければならぬ。…そろそろ時間だ。」

スッ…

おもむろに鎌を持ち上げるアルフ。

「それって…僕を死神にしてくれるってこと？」

「…私には、権限がないから無理だ。閻魔に頼めば、もしかしたらなれるかもな。」

「そうか…それだけわかれば、大丈夫。さあ…早く僕を死神の世界へ！」

「死神に必ずなれる保障は無いのだが…。」

アルフは、やりやすいのかやりにくいのかよくわからない、とか呟きながら、鎌で斬る姿勢に入る。

「一応紹介しておくが…あとは自分で頑張れ。」

「わかった。」

「人間としてのエリックよ…さらば。」

ヒュッ…

ザシュ！

「…これからが大変だな。」

パタ…。

倒れたエリックを見据え、意味深に言うアルフだった…。

深い深い闇。

真っ暗で何も見えないし、何も感じない。

ああ、これが死というものなんだ…

「……………ここは？」

レリックは、目だけで周りを見回す。

意識も視界もぼんやりとしている。

かろつじてわかることは、白い柔らかい物体の上で寝ているということ。

「天国、かな…？」

ゆっくり起き上がり、呟く。

「惜しい！正しくは、“天界”だよっ。」

「わっ！？」

ザッ！

頭上から不意に聞こえた声に、驚き仰け反るレリック。

「驚かしちゃったみたいだねっ。あたしは、イリア。アルフにあんたのお世話頼まれたの〜！」

スタツ。

声の主、イリアはレリックの正面に降り立つ。

レリックは、興味津々でイリアを見つめる。

「な〜に？イリアちゃんに惚れちゃった？でも、イーリアちゃんには、アルフがいるから、気持ちには応えられないよっ！」

イリアは満面の笑顔でおどけた。

「あ…あの…アルフさんに頼まれたって…あなたが僕を死神にして

くれるの？」

「ん…まあそういうことかな。」

「本当！？」

「ただし…」

イリアは言葉を一旦切る。

左手人差し指を前に突き出し、真剣な表情。

「ここからが大事なことだよ！死神になるには、本当は閻魔様に選ばれた人間しかねないのっ！あんたは選ばれてない…だから、研修しなきゃだめなんだよ！」

「研修…？」

レリックは、きょとんとして目をパチパチさせる。

「そだよ！け・ん・しゅ・う。」

イリアは、軽快に言葉を繰り返す。

「いゝい？あたしが今からお仕事入ってるから、着いて来ること！」

「すぐには、死神になれないの？」

「無理無理！だって、レリックって言ったけ？あんだ、10歳でしょ？」

「うん、10歳だけど…？」

「12歳以下の子が死神になる時は、何回か研修が必要なんだよっ！ベテランの死神さんに着いていって、現場を学ばなきゃ！」

イリアは、ベテランという響きが気に入ったようで、ご満悦。

「はあ……。そういつことなら……僕は本気で死神になりたいから、研修行く！」

「決まり！じゃ、今すぐ行くよっ。手、出して！」

「……？」

レリックは、よくわからずに手を差し出す。

「あんた、まだ翼持っていないから飛べないでしょ？」

「あー……なるほど！」

イリアの補足に納得。

7番街。

ガヤガヤガヤガヤ。

祭りがあっているらしく、出店が数多く出現している。

当然、道路は祭りを見に来た民衆で埋め尽くされている。

出店からは、クレープの甘い匂いや、焼き鳥の香ばしい匂いが漂ってくる。

「ふんふん。あとで、お祭り見てこつかなー！仕事優先だけどつ。」

「あの…イリアさん？今から仕事…つまり、人を殺すというのに楽しそうだね…。」

レリックは、イリアと手を繋ぎ、電柱ほどの高さで浮いていた。

イリアは、えっ？というような驚きの表情を見せる。

「あんた…死神になりたいって言ったくせに、今更何言ってるの？楽しく仕事しなきゃ、死神なんてやっていけないでしょ！」

「でも…」

「それに…あたし達は、『殺す』じゃなくて、『迎える』のっ！…あ、ターゲット発見っ！」

グイッ！

「うわっ！？」

イリアに急に引っ張られ、体が斜めの状態のまま、連れていかれる
レリック。

イリアとレリックは、ハンバーグの出店の屋根に降り立った。

「寿命は…あと一分ってとこかな。よっし、準備…っと！」

スッ…

イリアは、背中にかけておいた鎌を手を持つ。

両刃付きの鎌だ。

「ターゲットって…あのお母さん…？」

レリックは、すぐ斜め前の綿菓子屋にいる女性を指差す。

五歳くらいの二つ結びの女の子と、七歳くらいの茶髪の男の子に綿菓子をせがまれている。

「おかーさん！綿菓子♪綿菓子♪」

「ママ！僕も！僕も！」

お母さんと呼ばれている40代の女性は、仕方ない子達と苦笑しながら、代金を払っている。

「そつだよ♪じゃ、行ってくる…」

ガシッ！

「ちょっ…あんだ、何すんのよっ!？」

イリアは、驚きと怒りの入り混じった声を上げた。

…レリックが、悲しげに目を伏せ、イリアの右腕を掴んだからである。

「……て。」

蚊の鳴くような小声。

「えっ？何よ…聞こえないっ！！」

「止めて！あの人、迎えに行かないで！」

レリックは、すぐるような目つきでイリアに言った。

「はあ？そんなこと言われても、仕事だし…」

「お願い…。あの人は今死んじゃったら、あの子達どうにもできなくなるから…。だから、殺さ…」

「あんた…バツカじゃないの！？死神って、こういう仕事なのっ！躊躇ってたら、ダメなのっ！！」

パッ…

「あっ…」

イリアは一瞬のスキについて、レリックの腕を振り外す。

そして…

「ダメー！！」

спан！спан！

悲鳴と斬音が重なって響いた。

レリックは、思わず強く目を瞑っていた。

「あ…あ…ああ…」

ドサッ！

女の人の苦し気な声。

地面に体がぶつかる音。

そう…

イリアの容赦なき鎌によって、女の人は命を失ったのだ。

「ママー！！」

「おかーさん！？」

子供達が、母親に駆け寄り、体を揺する。

………母親の反応は無い。

腹部に二カ所斬り傷がある。

しかし、それは人間の目には見えない特殊な傷だった。

「嫌だー…ママー…」

「うえええーん！おかーさんが…」

ザワザワザワ。

泣き叫ぶ子供達。

通りかかった人達が、

「救急車を早く！」

「何があつたの!？」

「ええーん…ママー…」

「わあああん…!!」

子供達の泣き声が、辺り一面に響いていた。

大学生らしき青年が、女の人の手首をとり脈をはかっている。

「…仕方ないんだよっ！寿命なんだもん…。あたし達は、ただ迎える
に行くだけ…。」

問いかけに対し、弱気に答えるイリア。

「まあ、嫌ならならなければいいことだしね。そんなことは置いて…」

「そんなこと、じゃな…」

「黙って、聞いてなさいっ！」

激しく叱りつけられ、今度はレリックが目をぱくりさせる。

イリアは、レリックに人差し指をビシッと突きつけた。

「あんた、死神になりたいんでしょ？だったら、このくらいでへこんでたらやってけないよっ！だから、まだ研修しなさいっ！」

「僕は…」

「問答無用！！次は、リアゼと一緒に行きなさいっ！わかったなら、行くよ！」

パシッ！

「あ…離してよー!!」

イリアは、じたばたと暴れるレリックの腕をしっかりとつかむ。

バツ！

翼を広げ…

「脈がない…」

首を横に振った大学生や、泣き叫ぶ子供達、ざわめく野次馬達を尻目に…

バサッ…バサッ…

天界を目指して、はためく。

「離してったらー！」

レリックの金切り声が、風に流されていった…。

「リーアーゼー……！居るなら返事しなさいっ……！」

「……そんな大声で呼ばなくても、居るっつの……！」

最近できたばかりの中央広場の噴水。

その裏から、リアゼがひょいと顔を出した。

「離してってば……！」

バタバタ……！

相変わらず、レリックはイリアの手を引き離そうともがいている。

「兄貴が言ってた“レリック”だよな？」

リアゼは、レリックを一瞥した。

キツと鋭い眼差しをした彼と目が合う。

「そうだよっ！暴れるし、弱気だし、もう大変だったんだから！あんたと交代っ！」

トンッ！

「わっ！？」

ポフッ…

イリアに背中を突き飛ばされ、リアゼに正面からぶつかるレリック。

「そうかよ…。じゃ、俺も今から大変な思いしてくるぜ。」

「アルフが帰ってくるまでには、帰って来なさいよっ！」

「…言われなくても、わかってるぜ。」

イリアと兄弟のような会話をし、リアゼは翼を広げ、飛び立つ。

もちろん、レリックの背中を掴んで強引に連れて行く。

バサッ…

「わわっ！？何するの！？」

慌てふためくレリック。

そんな彼を嘲笑うかのように、高度は下がり確実に下界に近付いていく。

「しっかりやってきなさいよー！アルフに恥かかせないよーに！」

後ろから、イリアの不機嫌そうな大声が聞こえてきた。

「離してよ！僕はもう、残酷な死神の仕事には興味無……」

「あ、いたぜ！レリック、よく聞けよ？今から俺はあのターゲットを迎えてくる。だから、ここでよく見てろ。」

「だから、僕は……」

ストツ…

とあるスーパーの屋上に下ろされるレリック。

「話は仕事が終わってから、聞いてやるからじっとしてろよ。」

リアゼはそう言って、ターゲットに向かって飛び立つ。

バサッ…

バサッ…

「あつ…待つ…」

ヒュウウ…

レリックの制止する声は、風に流されてリアゼに届くことは無かった。

ターゲットは、白杖をつきながら、点字ブロックを歩いている男性。

歳は30代から40代ぐらいか。

髪は赤茶色で、自然なハネがついている。

目は深い茶色。

（もって3分つてところだな…）

寿命の炎から、読み取れた。

「さっさと終わらせるかな！」

チャキ…

一人で意気込み、小鎌を数本取り出すリアゼ。

（兄貴からの伝言では…できるだけ残忍に、だったよな…）

「俺の得意分野で良かったぜ…」

不敵に笑い、

ヒュッヒュッ…

鎌を青年に向けて投げつけた。

「逃げてー!!」

レリックは叫んだ。

遠すぎて聞こえるはずもないのに…

青年に向けて、声の限り叫んだ…。

ザシュザシュ!

「がつ…!」

数本の鎌の内、二本が青年の背中に刺さった。

どす黒い血がポタポタ流れ落ちる。

「くっ…あっ…」

青年は、数秒口をパクパクさせていたが、やがて…

ドッ…!

柱を失った建物のように、呆気なく崩れ落ちる。

「ま、こんな感じでいいよな?」

円上に赤く染まっていく地面と、苦しげな表情のまま亡き物となつた青年を見比べ、満足気なりアゼ。

一方。

遠くから一部始終を見ていたレリックの顔は青ざめていた。

あまりのことに、声も出ない様子である。

（僕は…軽く考えすぎてたみたい…。こんな仕事…僕には無理だ…。）

ポタ…

まだ10歳で、世間の無情さを知らない少年の目から涙が落ちる。

「かまいたちか!？」

「わからないわ…突然、倒れて…」

「ママー!怖いよ…」

「トウルちゃん…大丈夫よ…。ママが着いてるからね…!」

「誰か犯人の目撃者は、居ないのか!？」

辺りは騒然としていた。

現場に絶えきれず、血の気のひいた顔でトイレに駆け込む男性。

血が苦手なのか、その場にへたつと座り込む中年女性。

遺体の脈を確認しているサラリーマン。

「厄介なことになる前に引き上げるかつ！」

リアゼは、宣言するように言い、レリックを呼びにスーパーへ戻る。

バサッ…

バサッ…

スタッ…

「レリック！天界に戻るぜ！」

「……………」

レリックは無言だった。

悲しみと自分の無力さに肩を震わせ、うつむいている。

リアゼは、まいったぜ、と眉の横辺りをかく。

「ショックでかすぎたみたいだなーま、いつかは慣れるってもんだ。それに…ピンク娘から聞いたかもしねえけど、俺達はあくまでも“迎えている”だけだぜ…。」

「……………」

相変わらず、無言のレリック。

しかし、ほんの少しだけ顔を上げていた。

「おっ？何か言いたそうな顔だな？言ってみろよ。」

「……………僕は、死神になりたくなってきた…」

かろうじて聞き取れるぐらいの小声で、レリックは言った。

（兄貴の計画通り、だな…）

心の中でほくそ笑むリアゼ。

しかし、表情には出さないように努める。

「そりやまた、なんでだよ？兄貴が散々念を押したのに、聞かなか
ったって俺は聞いたぜ。」

「確かに…死神の仕事を間近で見るとは、なりたかったよ…。だ
けど今は…」

「今は…なんだよ？」

レリックの顔を覗き込み、つつけんどんに訊くリアゼ。

「実際に見た今は…死神になりたい気持ちは全然無い…。こんな仕
事…悲しくて、残酷で、辛いだけだよ…」

レリックは、眉を下げリアゼに悲しみの眼差しを向ける。

「ま、10歳なら普通の反応だと思うぜ。レリック…おまえは、大
人びすぎだからな。」

リアゼは、小さな子をあやすようにレリックの髪を優しくなでる。

「元々…おまえ、選ばれてねえから、無理に死神になる必要も無い
つつわけだ。…とりあえず、天界に帰るぜ?」

「……………うん。」

表情を変えぬまま、レリックは軽くうなずいた。

バサッ…

リアゼが翼を広げる。

青年が遺体となった現場は、静まることを知らないようだ。

次から次へと野次馬が増え、

「ひいっ！」とか

「きゃあ！」などの悲鳴がひっきりなしに聞こえてくる。

「背中につかまっときな！」

「……………」

素直に聞き、リアゼの背中につかまるレリック。

バサッ……

バサッ……

高度が徐々に上がっていく。

足が宙ぶらりん状態のまま浮く。

バサッ
…

バサッ
…

レリックは虚ろな瞳で、地上を見下ろしていた…。

天界に戻るまでずっと…ずっと…

バサッ
…

ストッ
…

天界と下界は、案外離れていない。

10分もあれば、お互いの世界を行き来することは可能だ。

「んじゃ、兄貴に伝えねえとな…」

リアゼは、レリックに聞こえないよう少し離れた位置で、呟く。

彼らは、イリアとリアゼが交代した場所に戻って来たのだ。

「……………」

天界に戻って来ても、レリックの浮かない表情は変わらない。

（死神にならなかったら…僕は意識のない霊というものになっちゃうのかな…？死んでしまっってからわかったよ…。僕は…）

「リアゼにレリック、か。」

アルフの声がレリックの思考をかき消す。

「兄貴！話があるっす…レリックの処遇についてで。」

アルフに近づき、リアゼは小声で要件を伝える。

「わかつている…。レリック本人から聞いていいか？」

「いいですよ…。しかし、俺の仕事現場見てから、ずっとあの状態なんですよー」

アルフもレリックに着目した。

俯いたままで、じっとその場に立ち尽くす姿に…。

「やりすぎたっすかね。」

「いや…協力してくれてありがとな、リアゼ。」

「兄貴の頼みなら、断るわけ無いから、気にしないでいいっす。それより…レリックに話し掛けて下さいっす。」

「ああ…そうする。」

ザッ…

ザッ
…

アルフは、レリックの１メートルほど離れた場所まで近づく。

「……………」

気づいているのかいないのか。

レリックの様子に、変化は見られない。

「レリック。」

アルフは声を掛けた。

「……………」

「レリック、死神になることを諦めたと聞いたが…？」

レリックの口がかすかに動いた。

声は小さすぎて聞こえないが、口の動きから察すると、
「うん」と答えているようだ。

「そうか…。では、今おまえが考えていることは、死神にならない自分は、どうなってしまうのか、なのだろう？」

レリックの肩がピクツと動いた。

（後は兄貴に任せていこう…）

リアゼは、そつとその場を離れた。

「そのことなら、心配する必要はない。もう手続きは済んだからな。」

「手続き…？」

ようやくレリックが口を開いた。

「私は…自分勝手な死神なのかもしれない。それに、死神には向いていない性格のようだと感じているのだよ。」

「……？」

話の唐突さにますます不思議に思うレリック。

彼の頭の中では、クエスチョンマークが無数に展開されていた。

アルフは、レリックではなく、どこか遠くの一点を見つめていた。

「それというのも、私は…子供がターゲットの場合、どうにかして生かしてやれないかと考えてしまう悪い癖があるからだ。」

「…アルフさんは、優しいんだね。」

誉められたというにも関わらず、アルフの表情は曇っていた。

それではダメだ、と言つかのように首を二度横に振って、アルフは言葉を続けていく。

「死神の仕事をするにあたっては、優しさや哀れみの感情は抱いてはいけないのだよ。」

「そういえば…」

と、レリックは何か思い出したように言った。

「そういえば…?」

「イリアさんが似たようなことを…」

「あたしが何だって?」

ストツ！

何の前触れも無く、突如イリアが目の前に降り立った。

これには、アルフもレリックも呆然としている。

「イリア…話を聴いていたのか。」

「仕事が終わって今来たところだよ。で…あたしが何だって？レリック。」

ポフッ…

イリアは勢いよく、雲のイスに座る。

「えっと…」

「死神が抱いてはいけない感情を、私もイリアも抱いているという話さ。」

どう話せばいいか悩んでいるレリックに代わり、アルフが答える。

イリアは、ふーんと興味無さそうな返事をした。

「あたしは、そんな感情持ってないよ？レリックの勘違いっ！」

「そうなのか？」

「うんっ！あたしはね、とっても楽しんでるんだ、この仕事。」

微笑みながら言うイリア。

「私は…よくわからない。ただ、あのことを知るまでは辞めるわけにいかないだけであって…」

「あの…言いにくいけど話が逸れてる気がする。」

レリックがやや控えめに発言した。

「…確かに、脱線してしまっているな。では、話を戻そう。」

アルフは、視線をレリックに移す。

「なにになに？どんな話してたの？イリアちゃんにも聞かせてっ！」

「詳しくは、後で話すから少し静かにしてくれるか、イリア。」

「あ…ごめん。」

アルフに諭され、イリアはしゅんとして、口を閉じる。

「まあ、私にはそういう感情がまだ残ってしまっている。まだあなたは若い。十分に親孝行してから、天界に来るべきだと勝手に考えたからだ。」

「……………」

レリックは目を伏せて、アルフの言っていることの意味を考えているようだ。

「子供の内に亡くなるのは、最大の親不幸だと思う。私は…重ね合わせているのかもしれないが。自分ができなかったことを、押し付けただけなのかもしれないな。」

ふっ、と自嘲気味に笑うアルフ。

「……………ぶはっ。もう喋っていい？ずーっと黙ってるのは、あたしにとって拷問だよー！」

イリアが泣きそうな声で訴えた。

「ではな、レリック。」

「うん…ありがとう、アルフさん。」

窓が開け放たれたレリックの部屋。

アルフとレリックは、別れの挨拶を交わす。

その後。

レリックは納得したようにうなずき、下界に戻りたい意志を伝えた。

手続きは済んでいる。

だから、アルフとレリックは、イリアをその場に残し、最高神力者の千爺に最終的な許しを得て、下界に飛び立つ。

イリアは、あたしも行く！と騒いでいたが、アルフになだめられ、渋々承知した。

そして、今に至る。

「リアゼさんとイリアさん、それに…千爺ちゃんだっけ？みんなにもありがとうって伝えてくれる？アルフさん。」

「…必ず伝えておこう。では、私は次の仕事があるから、そろそろ戻る。」

バサッ…

アルフは、翼を広げ、天界に帰っていく…。

（さようなら…アルフさん…。僕、死神になりたい気持ちは消えたけど、尊敬する気持ちが新しく生まれたよ…。）

レリックは、アルフの後ろ姿をうつとりしたような表情で見送っていた。

アルフの後ろ姿は、徐々に小さくなり…

一分もしない内に雲の中に消えていった。

同日、人間時間17時53分。

バシュ！

「……っ！」

アルフは右肩を押さえ、ガクンと片膝をついた。

肩からは赤黒い鮮血が滲み出し、うつすらと刻印が浮かび上がった。
きた。

「これ以上は…助けるなという警告か…。」

アルフは、ぽつりと呟いた。

刻印には、天界で“猶予無し”という意味を表すドクロが刻まれていた。

『死神黙約第28条。如何なる理由があろうと、目標人物を故意に生かすことを禁ずる。この禁を破り続けた者には、刻印が刻まれ、やがてその存在を消滅される。』

パラパラ…

その書の最後のページ。消滅候補の欄に“アルフレッド・フィアラ

”と書かれていた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
...

レクイエム（前編）

「僕が助け出せる子供は、君が最後になりそうだよ…。」

多くの人々が眠るバーネッティ市の墓場。

黒いフードコートをかぶり、大鎌を持った青年はかすれたような小声で言った。

まだ20代前半といった若さだろうか。

茶色い髪が青年の鼻までを覆い隠している。

「どついう意味？」

言葉を返した少年は、緑に近い青色の髪にオレンジ色の瞳。

まだ小学生にも上がらない歳に見える。

目を大きく開き、まばたきを何度もしながら青年を見つめている。

「…いや、他愛もない独り言だよ。ただ…ちょっと吐き出したくな
ってね。」

「……………」

「幼い君が知るには、まだ早すぎる。君は何も気にせず、今まで通
り生きていきなさい。」

「あっ…」

フードコートの青年は、少年の額を人差し指でトンと押す。

すると。

フラッ…

トサッ…

魔法にかけられたかのように、少年の体は簡単に地面に落ちた。

「これでよし…かな。あとは…」

青年は、灰色の雲に覆われた空を見上げる。

コロコロ…

遠くから雷の轟きが聞こえてくる。

「ふっ…まだまだ助け足りないけど、これも僕の運命だろうね。それに…」

今度は微笑み、少年を見下ろす。

「最後に君を助けられたから、良しとしようかな、アルフレッド・ファイアラ君。」

青年は、少年の髪を優しく数回なでた後、真剣な表情で遠くを見つめる。

そして…

「さあ…人の命を管理する神達よ。少年の寿命を伸ばした我に罰を与え、少年をこれからも生かし続けよ！」

誰にともなく叫んだ。

と、次の瞬間！

ガン！！

凄まじい轟音と共に、青年に稲妻が落ちた。

本当に一瞬のことだった。

気付けば、フードコートの青年は跡形も無く消えており…

あとには、青年が付けていたと思われる、シルバーのドクロのリングが残っていた…。

「閻魔…。私は、もうすぐ答えを見つけられそうだ。」

「また呼び捨て…：わしはすねてしまっぞ、アルフレッド・フィアラ

…。」

「…閻魔様。」

アルフは、嫌々ながらといった風に、視線をそむけて付け加えた。

「嫌そうじゃな、こら。…答えが見つかりそう、か。ならば、何かしらの覚悟が生まれたのではないか？」

「……………」

「恐れを抱いたのかな？わしでさえも恐れないおまえが。」

閻魔は、からかうような調子でアルフに聞いた。

「恐れではない…。ただ、今抱くのは世の不条理さに対する怒りだけだ。静かな怒り…。」

ギョツと、アルフは利き手の拳を握る。

「怒ったところで、何も変わりにはせぬぞ？」

「わかっている…。」

「今のおまえにできることは、残された時間を有効に悔いなく使うことじゃ。こんなところで、わしと雑談をする暇があったら…、仕事に行くがよい。」

そう冷たく言い放つと、閻魔は作業場であるマグマの底に戻っていた。

（残された時間、か…。）

コポコポ…

煮えたぎるマグマの音が、妙にアルフの耳に響いた…。

カーン
...

カーン
...

カーン
...

ミサの時間を知らせる鐘が鳴り響いていた。

過疎化してしまった地域にある、古びたちっぽけな教会。

その教会の前には、無数の人々が眠る墓場があった。

どの墓場にも、花束やお供え物が供えられている。

カーン…

カーン…

カーン……………。

教会の鐘が止んだちょうどその時だった。

一人の女性が墓場を訪れた。

長い黒髪をバレッタで止め、白いワンピースを着こなしている。

瞳は、紫色。

整った顔立ちの美人だが、どこか悲しげな表情だった。

ザッ…

ザッ…

女性は、中央付近の墓場に、菊の花束をそつと供えた。

そして、軽やかに歌い出した。

「時は…早く過ぎ去り…」

「絆は…脆く崩れる…」

そう…消えゆく死神に贈る歌…レクイエムを…。

神力庵。

「遂に始まるようじゃのう…。覚悟はできているのか、アルフ…」

誰にともなく呟く千爺の姿があった。

「遂に始まる、か…。」

庵の裏庭で、シークが繰り返すように呟く。

チャリ…

数日前、アルフに預かるよう頼まれたシルバーのドクロのリングを見つめながら…。

「兄貴！聞きたいことあるんすけど…って、取り込み中つか？」

「いや…構わないが。」

広場に居た死神との話を中断し、リアゼの方に顔を向けるアルフ。

「おやおや、何やら大事な話が始まるようで…。私は失礼しますよ、フィアラ君。くれぐれも気を付けなさい。」

「はい…ハイヤさんも気を付けて。」

バサッ…

バサッ…

アルフと話していた死神は、下界へと飛び去っていった。

アルフに一礼をして。

「今の爺さん…ハイヤさんって言うんすか。60代ぐらいに見えたんすけど…随分派手っすね。」

「そうか？」

「そうっす。灰色のパーマ髪に、黄色のニット帽…右手の指全部に指輪…銀色の杖…。あんな爺さん、初めて見たっす…。」

驚きを隠せず、目をパチクリさせているリアゼ。

「…で、何の話をしてたんすか？“気を付けなさい”つつつことは、ただ事じゃないっすよね…。」

「……ハイヤさんは、天界一の早耳な人でね。私の名前が黙約の最後のページに載せられていたことを知らせに来てくれたのだよ。」

「へー…そうなんっすか…って、えっ!？」

リアゼは、驚きの声を上げた。

「兄貴…今、何って…？俺の聞き間違いなら、嬉しいんすけど…」

「……………」

アルフは、リアゼの質問に無言という形で答える。

「兄貴…。」

「それは、私が気を付ければどうにかなることだ。だから、気にしなくてよい。しかし…もう一つの情報は話しておこう。リアゼ、おまえにも関係あることだ。そして、イリアにも……………んっ？どうかしたか？」

アルフは怪訝そうに眉を潜めて聞いた。

リアゼが急にキョロキョロと辺りを見回したからである。

「あ、いえ…。噂したら、いつもピンク娘が話に入ってくるっすから、今日もまた突然出てくるかも、と警戒しているだけです。」

「なるほど。」

アルフは、納得したように言った。

数秒見回して、イリアの姿を確認しなかったので、リアゼはほっと胸をなで下ろす。

「仕事行ってるみたいっすね！ピンク娘は、ひょいと出てくるから、心臓に悪い……」

「まーたなんか悪口言ってるでしょー!!」

「のわっ!?!ピンク娘!!」

噂をすれば影。イリアがストツと二人の前に降り立った。

「毎度のことながら……イリアには驚かされるな……。」

見た目には驚いているとはわからないが、アルフの心臓はドキドキと早鐘のように鳴っていた。

…無論、恋のドキドキではない。

「そっかな？ いやー、あたしにも関係ある話って聞いたからっ！ …で、どんな話？」

イリアは全く気にせず、マイペースに言った。

「…レクイエムが下界で歌われたのだよ。」

「えっ…それってもしかして…」

「そういつとき。ついに…始まるのだよ。」

「な、何が始まるんすか…？」

リアゼだけが状況を飲み込めていないようで、不思議そうな顔をし

ていた。

イリアが意外そうに顔をしかめる。

「あんた、知らないの？」天界マニュアル”50ページぐらいに書いてたのに…。レクイエムが下界で歌われた時は…」

「天界戦争が始まる。」

「シーク…」

話に乱入してきたのは、眉間に深いシワを寄せたシークだった。

「天界戦争…？」

リアゼが繰り返す。

「横入り悪いが、レクイエムと聞いて、話に入らずには居られなくなっただけだから…。天界戦争というのは、平たく言やあ、天使

と神、悪魔と死神。 4つの種族の戦争だ。」

「それとレクイエムがどう関係あるんすか？」

「…レクイエムを下界で歌っている女性は、レクイエムの作者の彼女だったからさ。」

今度はアルフが答える。

「うーん…？」

「つーまーり！その人は、下界に居るけど天界の予言者ってこと！ここまで言えば、あんたでもわかるよね？」

「その見下した言い方はかなりむかつくぜ…。」

リアゼは、右斜め方向に目だけ向けてボソツと呟く。

「なーんか言った？」

「べ、別に。」

イリアに感づかれ、慌てて誤魔化す。

シークが口を開く。

「予言者である彼女の名前はルティーナ・ブルリエ。ルティーナは、天界から必要とされていたが、頑なに断り続けていた。自分は、寿命まで下界で生きたい、と。その代わりに、天界戦争が起こることを予知した時は、レクイエムを歌って知らせると約束し、守り続けている。」

「へえ…律儀つすね、ルティーナって人。」

「ま、彼女の話は余談として置いておいて…問題は天界戦争だ。恐らく、二、三日の内に始まるだろう。」

「そうだな。」

「始まっちゃうよね…」

シークの断言に、アルフとイリアが真剣味を帯びた口調で同調する。

「そういうことなら…早速、鎌の手入れするっす。」

ギユツ…

リアゼは、鎌を強く握りしめ、高々と持ち上げる。

「んじゃ、邪魔したな、三人共！俺は、爺さんの所で茶でも一服しながら、話してくる。」

バサツ…

「じゃあねー、シークー！あたしは…、今の内に買い物してこようと戦争始まったら、できなくなっちゃうもんねー。」

バサッ…

シークとイリアが去り、広場にはアルフとリアゼだけが残っていた。

「兄貴…、天界戦争って、何のためにやるんすか？」

リアゼがぼつりと聞いた。

アルフは、目だけをリアゼに向けた。

「…最高神力者を決めるためさ。」

「それって…今は千爺っすよね。千爺も参加するんすか？」

「いや…戦争には参加しない。参加してしまえば、千爺が勝つのは目に見えているからな。」

「あ、それもそつつすよね…。」

リアゼは、変なこと聞いてすみませんと、ぺこつと頭を下げる。

「じゃあ、兄貴？神じゃなくて、悪魔とか天使でも最高神力者になれるってことっすか？」

「そういうことだ。戦争は、他の3つの種族が3分の2の人数を失うまで終わらない…。」

「そんなに、っすか…。」

サー…

生温かい風が流れる。

「勝った種族には、虹色に光り輝く水晶が授けられる。その水晶に映った者こそ、最高神力者なのだよ。」

「そのために、戦うんすか…。なんか…複雑な気持ちっすね。」

リアゼは、参加は自由なんすか、と付け加えるように聞いた。

「…強制参加だ。種族ごとの戦争だからな。」

「…そうっすか。」

リアゼはもう何も聞かなかった。

2日後。 11時36分。

カンカンカンカーン！

鐘を打つような音が天界に数回響いた。

そして、

「天界戦争の始まりだー！！」

どこからか、そんな知らせの声が聞こえてきた。

その瞬間。

バサバサバサバサッ！！

無数の羽音が聞こえてきた。

それも10や20ではない。

天界のありとあらゆる所から、何千という羽音だ。

その中には、アルフやイリア、リアゼにシーク、エマ…も含まれて
いたことは言うまでもない。

「あーら、かわいい死神のお嬢ちゃん？私のために消えてくれる？」

パシュ！

クリーム色の淡い光を帯びた矢が放たれる。

サツ…

イリアは、このくらい余裕といった微笑の表情で交わす。

「だーれが、あんたみたいなおばさん天使のために消えるっていうのよっ？」

「おば…！？…もう許さないわよ…！」

「べー、だゝ悔しかったら、当ててみればー？」

パシュパシュ！

今度は一気に3本の矢が放たれる。

カンカーン！

二本にした鎌で弾き返すイリア。

「じゃ、次はイーリアちゃんの番っ！」

「余裕がましていると…足元すくわれるわよっ！！」

パシュパシュ！！

カカン！！

矢と鎌の攻防戦が数回行われた後、イリアは天使に向き直る。

「飛んでるから、関係ないもんねーだゝそ・れ・に…」

スタッカートで言葉を切って、一旦間を置く。

パシュ！！

カンカン！！

その間も天使の攻撃は止まない。

「あーんたみたいな下級おばさん天使には、イーリアちゃんは倒せませーんゝ」

「な、何ですって！？」

「ふふ…消えちゃえ♪」

「きゃっ!？」

ドゴン…!!

束の間のできごとである。

鎌から放たれた青い菱形の光の筋。

それが矢を射ろうとする一瞬の隙に、天使の胸部に直撃したのである。

あまりの速さに、天使は防御する術もなく、あえなくその技に倒れた。

「ま、あたしを襲った不運さをあの世で嘆き…はここだから無理だね…。無の世界で嘆いておいでよ♪」

ヒュン！

シュウウ…

イリアは高速でその場を離れた。

パラパラ…

敗者の天使は、白い粒子となり風に流され…消えた。

ヒュッ！

ヒュンヒュン！

悪魔は、さすまたのような物で、執拗にシークを狙う。

「俺様に会ったのが運の尽き！消えな、下郎死神共！」

「下郎か…。それは言い過ぎじゃないのか？」

カン！

シークは、鎌の刃ではなく柄で攻撃を受け止めている。

「ひゃはは！そろそろくたばっちまいなっ！」

シュウウ…

パシュウウ！！

血走った目をかっと思開き、悪魔は黒い閃光を放つ。

「おわつと！…てっ。」

ヒュッ！

パシッ！

交わすのが少し遅くなり、閃光がシークの左肩をかすめる。

ポタポタと鮮血が流れ落ちていく…。

「…っ…はは、しくじっちゃったな…。」

シークは、右手で左肩を押さえる。

口元と目の歪み具合から、その痛さのほどがうかがえる。

「泣いて土下座すりゃ、この寛大なテックル様は見逃してやらんこともないぞ?」

悪魔は勝ち誇った表情で、シークにさすまたを向けて見下ろしている。

「泣いて土下座、ねえ…。俺には似合わねえわな。」

「ならば、そのくだらないプライドを呪いながら消えろっ!」

バシュ！！

悪魔は言葉と同時に、黒い閃光を放つ。

ヒョイ…

今度は、軽々と交わすシーク。

「なっ…！？」

「…というわけだから、悪いが勝たせてもらっな。」

シュッ…

イタズラが成功した時の子供のような笑みを浮かべ、シークは悪魔の前に瞬間移動した。

「ちっ…！」

悪魔は舌打ちし、体をのけぞらせる。

「言い忘れたが…」

チャキ…

鎌をかまえるシーク。

「俺の攻撃は、後からくるぜ？」

「くっ…ぐわああ…！」

シャシャシャ！

ズシャ！！

全身に深い切り傷を負い、崩れ落ち動かなくなる悪魔。

出血は、雲を赤く染める。

「ど…いと…だ……………」

「さあねえ？ 種明かししないのが、マジシャンのルールだからな。
はっはっは…。」

シュウウ…

シークの空笑い声を聞きながら、悪魔は無の世界へと誘われ…

やがて、その存在を消した。

「ふう…。やられるフリも楽じゃないってやつだな。」

「さすが、名売れの元マジシャン。見事だよ。」

バサッ…

バサッ…。

そう言いながら、シークの隣に降り立ったのは、エマだった。

「いや、どちらかといったら、ペテン師に近いかな、シークは。」

「自問自答かよ？それに、ペテン師は無いだろ。」

「ふふ…。シークの鎌は、“後斬り”ができるタイプだから、ペテンみたいなものと自分は思っけど？」

「“後斬り”…。ま、ペテンと言われりゃ、否定はできねえわな。」

違いねえな、と苦笑するシーク。

「和んでる暇は無さそうだね…。行こうか。」

エマがそう言ったわけは、バサツバサツという羽音が聞こえてきたからだ。

「おうよ。かなりの人数のお出ましのようだ。手伝ってくれると有り難い話だな。」

「そんなに横目で見なくても、乗りかかった船。手伝つよ。」

「サンキュー。じゃ、行くぜ?」

バサツ…

シークは羽音のする方に向かい、飛び立つ。

「それは、自分が先に言ったセリフ。真似するなよな！」

バサッバサッ…

笑顔で毒づき、エマもシークの後に付いて、飛び立っていった…。

「この数はさすがにきついすかね…兄貴？」

「確かに…一人の場合ならばな…。」

リアゼとアルフは、背中合わせになり、戦う構えをしていた。

「キヒヒヒ…」

「クフフフ…」

「カカカカ…」

二人は50は越えるであろう数の悪魔に囲まれていた。

皆、さすまたを手に獲物を狙うような怪しい目つきで、二人を見ている。

中には、ペロと舌なめずりしている者もいた。

「二人も発見。それも弱そうな青年死神。」

「この人数なら余裕。それ、かかれ!」

金髪の悪魔が指示すると…

バサバサッ!!

シャシャシャ!!

悪魔達は、さすまたでアルフとリアゼに一斉攻撃にかかった。

「二人なら、余裕っすね…てりゃ!」

ヒュッ！

ヒュッヒュッ！！

ヒュッヒュッヒュン！！

リアゼは、悪魔の輪からすり抜け、小鎌を投げつける。

span>パンパン！！

グサッサッサッ！！

「くはっ！！」

「っあああ!!」

小鎌は、狙いたがわず数体の悪魔の体を切り裂いたり、刺したりする。

中年の悪魔は、眉を左右不平等に動かし、少し怯んだ表情を見せる。

「ちっ…そっちは強いようだ…。もう一人を狙え!!」

「はいよ、頭領!!消えな、死神!!」

バシユ!!

緑髪の悪魔が、アルフに向けて黒い閃光を放つ。

サッ…

アルフは、わざと鎌に閃光を当てる。

シュウウ…

閃光は、鎌に吸い込まれるようにして消えた。

「へっ！？そんなのあ…」

「有りだ。荒れ狂うつむじ風！」

ヒュウウウ！！

спан！！

シュシュッ!!

アルフの鎌から解き放れた豪風は…

「ひえええっ!?!」

「くっ…ああああ…」

悪魔達の体を傷つけていく。

切り刻み、取り囲み…

しかし、いずれも致命傷は与えない。

「まだまだいくっす!-!」

ヒュッヒュッ!!

スパンスパン！

「恨みはないが…降りかかる火の粉は払うまでさ。」

ゴウウウ…！

ザシュ！スパン！

……………。

三分もかからず、全ての悪魔達は雲の地面に伏し、動けなくなってしまった。

「ふう…ちょっと疲れたっすね。もうこれで、何人目っすかね…？」

ポフッ…。

リアゼが雲に座り込んで聞いて、

「さあな…。」

端的に応えを返し、同じように座り込むアルフ。

また、ポフツと雲が揺れた。

いつでも戦えるように、鎌の柄が肩にかかるよう持っている。

「まだどの種族も三分の二以上減っていないんすか…。喜ぶべきなんすかね…それとも…」

「……………わからないが、休憩している暇はあまり無いようだな。行くか、リアゼ。」

アルフは、すくつと立ち上がりバサツと翼を広げる。

「そうみたいっすね…。落ち着いたら、続きを話すっす!」

バサッ…

リアゼも立ち上がり、すぐにでも飛び立てる準備をする。

…襦がある付近から、悲鳴と狂気的な笑い声が風にのり、二人の耳に届いてくる。

二人の死神は、その方向を向き…

バサッ…

バサッバサッ…!

羽音を立てながら、横並びで飛び立つのだった。

それぞれの決心を胸に…。

戦争開始から16時間20分経過…。

キイイーン…！！

天界全土に響き渡るほどの大音量で、アナウンスが流れる。

「途中経過を報告いたします。天使は2分の1、悪魔は3分の2、神は5分の4、死神は3分の2となっておりまーす！！皆さん、他の種族を絶やすまで頑張ってくださいーい！」

中年男性の声だった。

時々、笑い声を入り混じらせ、戦争を楽しんでいるかのようなだった。

「悪魔と同数っすね……。これじゃ、いつ戦争が終わるのか、見当がつかないっす。」

ヒュッヒュッ！

「ぐあっ！？」

小鎌の攻撃の手は休めず、リアゼがため息混じりに言った。

「確かにそうだな…」

ヒュウウウ…

パシッ！ズサッ！！

「うわあああ…」

同様に大鎌での攻撃は止めないまま、アルフが応えた。

「他の種族を滅ぼして、最高の種族と敬愛される…。なんか…あまり喜べないっすよね。」

ヒュッヒュッ！

「……………」

ゴウウウ…！！

パシッ！

リアゼは、手元に戻ってきた小鎌を掴み、服の内ポケットにしまう。

「ああ、実に悲しく虚しいことだ。」

ゴウウウ…

トントント…

大鎌を肩に立てかけるアルフ。

……。

いつの間にか、辺り一帯シーンとしていた。

アルフとリアゼ以外でその区域にいる者は、皆倒れシュウウ…という音を出しながら、粒子になっていったのだ。

「あ！兄貴、関係ない話なんすけど、一つ聞いていいいっすか？」

リアゼが思い立ったように、唐突に言った。

「聞きたいこと？」

「はいっす。兄貴…人間だった頃、夢ってありました？」

「夢、か…。」

アルフは、遠い過去を思い出そうと、しばしの瞑想に入る。

もちろん、いつ襲われるかわからないので、耳を研ぎ澄まし気は緩めず。

「因みに俺は……獣医になりたかったす。似合わないかもしれないけど。」

てへへと、照れ臭そうに笑いながら頬を染めるリアゼ。

アルフは、瞑想を止めリアゼの方を向く。

「似合わないことはないと思うが？それに、立派な職業だ。」

「そ、そうっすか？恐縮っすね…。でも、そう言われると嬉しいっす！兄貴は…？」

「私は……っ！？伏せろ、リアゼ…！」

ザッ！

「わっ！？」

アルフは言い止めて、リアゼを庇うようにして伏せる。

ヒュッ！

空を斬るような鋭い音が、彼らのすぐ上を通過した。

「…油断していると思ったが、なかなかできるようだね。」

どこからかそんな声が出た。

バッ！

素早くリアゼから離れ、声の主を探すようにキョロキョロするアルフ。

「な、何っすか…？今の…」

「そこか…？」

ゴウウウ…！！

アルフの鎌から放たれた台風のような風が、リアゼの言葉をかき消す。

バシッ！

確かに手応えがあったような音がした。

しかし、声の主は姿を現さない。

「どこを狙ってる？私はこちらだ。」

また声がした。

「！？兄貴、後ろっす！！」

「なっ…っ…！？」

ガシッ！

リアゼの叫び声は、少し遅かった。

アルフは、姿の見えない何者かに捕らえられていた。

クスクス笑いながら、姿を現した者は、女性の神だった。

整った顔立ち、長いまつげを備えた瞳。

クリーム色の長い杖。

「メルディ…か…？」

アルフが苦しげにようやくそれだけ呟いた。

ギリギリ締め上げられているため、目がかすみ、よくは見えない。

しかし、彼はメルディに似てると感じたのだ。

「へっ？知り合…」

「…気安く呼ばないで…！」

ギリッ…

「くっ…っ…」

極限まできつく締め上げられ、アルフの意識が薄らいでいく。

メルディと思われる神と、リアゼの姿が二重に見えていた。

「兄貴を離せっ！」

ヒュッヒュッ！

また弾かれるとわかっていつつも、リアゼは紐のような物に向かって、鎌を投げる。

「うるさい坊やね…」

シュパン！

「えっ…そんなまさか…!？」

リアゼは目を見張った。

女性の神は、鎌を弾くどころか杖で半分に斬ったからである。

トンッ…

半分になった鎌は、白い雲の上に落ちた。

「全く…血の気が多い坊やは、こつよ。」

スッ…

神は、杖を持ち上げた。

（な、何か来るっすね…。）

リアゼは、サッと小鎌を取り出し、攻撃に備える。

本当は、アルフを一刻も早く助けたいのだが、神を倒さない限り無理だと悟ったからだ。

「光の裁き！」

叫ぶと同時に、神の持つ杖からオレンジ色の光が溢れ出し…

バシユシユシユ！

それは、槍となりリアゼを襲う。

「くっ…小鎌乱舞！」

リアゼが言うと、数十本の小鎌は彼の周りを竜巻のようにくるくる回り覆った。

カカン！

それにより、いくつかの槍を弾き返す。

しかし…

ドスッ！

「……………っつ！？」

一本だけその包囲から逃れた槍があつた。

そしてそれは、たった今、リアゼの脇腹に深く刺さつたのだ。

ポタ…

ポタポタ…

脇腹からゆっくりと流れ落ち出す鮮血。

「兄…貴…」

ドサッ！！

痛みと失血により、雲に伏し意識を失うリアゼ。

神はその様を見届け、手間かける坊やね、と愚痴りながら、アルフ
に向き直る。

今や、アルフも完全に意識を失い、固く目を閉じていた。

「気を失ったようね…あら？」

アルフの肩の刻印を、神は顔を近付けて間近で見る。

「これは…！驚いたわ…まさかコインがこんなところに居るなんて
！！」

「おっ！お手柄だな、メルディアン・イーグル。」

「ハッシエ…。」

ハッシエと呼ばれた神は、アルフに近づき、ひょいと肩に担ぐ。

「じゃ、さっさとコインを連れてこうぜ！…あの場所にな。」

「ええ…そうね。」

ハッシェに言葉を返しながら、メルディアンはリアゼの方をちらつと見た。

長いまつげでまぶたが覆われ、体はピクリとも動いていない。

鮮血は止まることを知らず、流れ続けている。

「……………」

メルディアンは、一瞬表情を曇らせたが、すぐに普通の表情になる。

「ん？そいつが何か気になるのか？」

飛び立ち、徐々にその場を後にしながら、ハッシェが訊いた。

「いえ…何でもないわ。」

パサッ…

メルディアンも、白い翼を羽ばたかせ、ハッシエの後に続き飛び去っていった。

後に残ったのは、傷を負い雲に倒れたリアゼのみだった…。

レクイエム（前編）（後書き）

次の話で最後…。

読んで下さった皆様ありがとうございます！！

最後までごゆっくりお楽しみ下さいませ（・ω・）／

レクイエム（後編）

「また一つ…存在が消える…」

どれくらい時間が経っただろうか。

誰かの美しい歌声で、アルフは目を覚ました。

「……………」

辺りがぼやけて見える。

意識もまだ完全には回復してないようだ。

おまけに、黒い縄のような物で全身を縛られているため、身動きができない。

それでも、彼は歌声の主を確認しようと目をこらす。

聞き覚えのある優しい歌声…。

この声は…？

「メルディ…？」

ピタ…

歌声が止まった。

アルフに話しかけられた女性は、ゆっくりと振り返る。

瞳にうつすら涙を浮かべ、訴えかけるような表情だった。

「アルフ…、ごめんなさい…。」

女性は、小さな細い声でそう一言詫びた。

「やはり、メルディだったのか…。」

「そうよ…。」

……。

二人は、お互いに見つめ合い、しばし無言だった。

懐かしさともどかしさが交錯しあい、過去の記憶が蘇える。

『ねえ、あなた。アルフレッド君だったわね。私と友達になりましたよ…』

『私と友達に…か。あんたは物好きなんだな。』

『それは違うわ。みんな、あなたと仲良くしたいのに、あなたがそれを拒んでるだけ。ねえ、どうしてなの？』

『…傷つけたくないからさ。人を傷つけるのも、人に傷つけられるのも、どちらももう勘弁だからな。』

『そうだったのね…。そんな理由なら、やっぱり私と友達になりましょうよ！』

『あんた…人の話聞いてなかったのか？私は、もう勘弁だと…』

『あなたこそ、私の話を最後まで聞きなさいよ！私は、絶対にあなたを傷つけないし、あなたに傷つけられないわ。断言するわ！』

『…根拠でもあるのかい？』

『無いわ。でも…断言するの。』

『ふっ…。あんた…変な奴だな。』

『そっいつあなたこそ！ふふふ…。』

……………。

「私のことを忘れてしまったかと思ったが…覚えていてくれたのかい？」

先に沈黙を破ったのは、アルフ。

視線を雲に移し、問いかける。

「忘れたことは、一度もない…それに、あなたのことをまだ深く愛

してるわ…」

メルディは、右手人差し指で、涙をぬぐう。

「でも…あなたは死神。私は…神。似ているけれど…相いれない存在だわ…。それに…」

「私はコインだからな…。」

アルフは、フツと自嘲気味に笑った。

「あなたがコインなんて…信じたくないの…。もうすぐ消えてしまふ存在だなんて…」

「しかし…事実だ。私は、覚悟はできている…」

「……………アルフ。」

ギュッ…。

「メルディ…？」

メルディは、後ろからアルフを抱きしめた。

目を瞑り、口を閉じたまま数秒間の間…。

「兄貴…！！」

ガバッ！

「……………つてえ…」

上半身を慌てて起こしたが、腹部に激痛が走り、また寝そべるリア
ぜ。

「それだけ深いケガしてて、起きれるわけないじゃん！」

「っ…あ、ピンク娘…？」

声のする方に目だけ向けると、呆れ顔でリアゼを見ているイリアと
目が合った。

「元気が良い目覚めだね…。若い子はうらやましいよ。」

「まだ20代だろうが…。」

イリアの後ろから、コント調で会話をしているシークとエマの姿も
見えた。

「で？どんな奴にやられたの、リアゼ。それに、アルフがどうかしたの！？」

「聞く順番、逆だろ……。」

ケガをしている時でも、突っ込みは忘れないのがリアゼである。

彼は、痛ってえ……と、顔を歪めつつも体を起こす。

今度はゆっくりと。

傷に負担をかけないためと、腹部全体に巻かれた包帯がはがれないようにするためにも。

「そっぴゃ……リアゼ。ずっと、『兄貴……』って呟いてたが……アルフがどうかしたのか？俺も嬢ちゃんと一緒に、気になって仕方なくな。」

「兄貴は………女神に誘拐されたっす！！」

「えっ……ええええっ！？」

イリアが叫んだ。

シークとエマは、叫びこそしなかったが、呆然としている。

「誘拐だ…？」

「まさか、ね…。アルフだっけ？自分の見た感じでは、彼は捕まりそうになっても、返り討ちにできそうな気がするんだけど。」

「不意打ちだったんすよ…。兄貴は、俺を庇うことに集中してたから、そのせいもあるかもしれないけど…。」

二人の意見に、自分を責めるようにうつむいて言葉を返すリアゼ。

「どうやって誘拐されたとか考えてる場合じゃないでしょ！？どうやって助けるかを考えないと…！」

イリアは、拳に力を入れ前に突き出し、戦う姿勢をしてみせる。

「…嬢ちゃんの言う通りだな。」

シークはイリアに賛成し、腕組みして考える。

「で…、リアゼ。その女神の特徴とか覚えてるのか？」

「しっかり覚えてるっす…。名前も…確かメルディとか兄貴が言うて…」

「メルディ…！？本当に…そういう名前だったのか…？間違いではないよな？」

シークは信じがたいことのように、念押しして質問した。

「そ、そうっすけど…知ってるんすか？」

「……………まあな。」

「えっ？ シーク、知ってるの？ メルディって誰！？ アルフと何か関係あるの！？」

今にも噛みつきそうな勢いで、イリアがシークに聞く。

「ああ… 嬢ちゃんは聞いてなかったんだな…。メルディは……………」

「メルディは…？」

「人間だった頃のアルフの彼女だ。まさかこっちの世界で神になってるとはな…。アルフもさぞかし驚いたことだろうよ。」

「アルフの元彼女…？」

フラッ…

「イ、イリア！ 大丈夫？」

後ろに少しよろけたイリアの背中を、エマがしっかり支える。

「兄貴の彼女…。信じられないっす…。」

リアゼはよろけはしなかったが、放心状態だった。

「待てよ…アルフの誘拐…神のメルディ…リングを預けた…。」

「ん？シーク、ぶつぶつ言ってるした…」

「そうか…アルフは……コインなのか…」

シークが断言するように呟いた。

「アルフ…逃げて。お願い…」

「……………！？」

スルッ…

メルディがアルフから離れたと同時に、アルフを縛っていた紐がほどけた。

「今なら…見張っているのは私だけだから…」

「しかし、私が逃げればメルディが罰を受けるのではないか…？」

「…私は大丈夫よ。あなたが逃げられるだけの時間を稼ぐわ。」

メルディは、力なく微笑んだ。

「私…このくらいのことしかできないから。あの時も、あなたを助けられなかったし、あなたを悩ませてしまった。今…その償いをするの。」

「メルディ…？」

「行つて！早く！！！」

自分に近づこうとしたアルフを、手で追い払う仕草をし遠ざけるメルディ。

「…わかった。一つだけ言わせてほしい。メルディ…私も君を愛していたさ。…ありがとう、さよならだ。」

バサッ…

バサッバサッ…!!

メルディに背を向けて、アルフは東方へと羽ばたいていった…。

「それで運命が変わるとでも思ってるのかねえ、メルディアン。」

「……………！？ハッシュ、まさか今の見てて…」

「たりまえでしょうが。今頃、逃がした甲斐なく捕まってるさね。」

ハッシュの言葉を聞き目を丸くし、メルディはしばらく呆然と立ち尽くしていた。

「コインって…確か生贄のことだったっけ？」

「生贄…？」

「はっ…アルフが生贄…ってどういうことよ!？」

エマ、リアゼ、イリアの順で聞く。

放心していたイリアは正気に戻ったようだ。

「おっ、嬢ちゃんも気が付いたか。…これは、本当は口止めされてただけだよお、仕方ねえな。ま、アルフのことだから、上手く逃げ出してくるだろうよ。それに…助けるとすりゃ、生贄の儀が始まってからの方が都合はいいぜ。」

シークは、雲の上によつこらしよと座り、話し始めた。

シーク以外の三人は、何か言いたげに口をパクパクしていたが、シークの様子を見て大人しくその場に座った。

「コインつつうのはな、戦争を納めるための生贄を指す隠語だ。…天界戦争は確かに、他の種族を3分の2まで減らしゃ勝ちだ。だが、戦争が終わったことを知らせないと、誰も戦争を止めやしない。だから…それを知らせるためにも、生贄の儀式が必要つつうわけだ。」

「なるほど…。でも、なんで兄貴なんっすか？」

「そ、そうだよ！アルフが生贄にならなくちゃいけないわけじゃないんでしょ？」

「それは、だな…」

シークは、言い止めて目を丸くした。

「それは…何っすか!？」

「アルフ…」

「へっ!？」

「えっ!？」

「噂をすれば影ってわけか…。」

皆、シークが指差す方向に視線を移す。

そこには…。

「…私でなくてはならないのだよ。フィアラ一家の一員である私でなくてはね…。」

冷やかな瞳で皆を見ているアルフの姿があった。

「ア、アルフ…。無事だったんだねっ！あたし、心配で心配で…でも、良かった。」

そう言つて、笑顔で抱きつこうとするイリアに鋭い視線を送るアルフ。

「イリア…来るな。私は、帰つて来たわけではない。シークに用事があつただけで、すぐ生贄の場所に行くのだから。」

「あ、兄貴…？」

「シーク…」

ザッ…

ザッ…

怪訝そうな表情で声をかけたリアゼを無視し、シークに歩み寄る。

「シーク…。私が預けたリングは…」

「あ、ああ。これのことだよな？」

キラッ…。

シークは、ズボンのポケットから銀色のリングを取り出した。

「…ルティーナ・プルリエに、そのリングを返してほしい。私には…もう時間が無いから、頼む。」

「ルティーナがどこにいるか、教えてくれないと、シークも探しようがないんじゃないかな？」

エマがアルフに聞こえるように、わざと通常より大きな声で言った。

「……………」

「アルフ…なんか怖いよ…どうしちゃったの…？」

イリアは、怯えているような表情で、リアゼの後ろに隠れていた。

「…時間が無いのだ。シーク…ルティーナの居場所は自分自身で見つけてほしい。きつと…リングが導いてくれるはずさ。」

「ああ…わかったよ。」

シークはリングをしまい直しながら、生返事した。

「では…失礼する。」

バサッ…

「待って、アルフ！」

「待つつす、兄貴!!」

ガシッ！

パシッ…

「……………！？」

今にも飛び立とうとしていたアルフの腕を、イリアとリアゼが抱きつくようにして押さえる。

「離せ…私はもう行かなくては…」

「ダメ！アルフ…生贄になんかなる必要無いんだから！」

「行かせないっす！」

「……………っ！」

アルフは腕をブンブン振り、二人を引き離そうとする。

…が、二人は腕にしがみついて全く離れようとしない。

「…わかっていねえな、おまえら。アルフが生贄にならないと戦争は終わらないんだぜ？」

「…シークの言う通りだ。私が行かねば、もっと多くの犠牲が出るのだよ。」

「だからって…アルフを犠牲にして、みんなが助かる。それでいいわけではないじゃない!？」

シークとアルフの意見に、イリアは怒り気味で答えた。

「…いい加減離れろ。」

ヒュウウウ…

「きゃっ…！」

「わっと…！」

一瞬のスキを見計らい、アルフは風を起こした。

風のせいで、イリアとリアゼはアルフから手を離してしまう。

「私は急ぐのだよ…。」

バサバサ…

「あっ…シーク！エマ！アルフを止めてよ…！！！」

ヒュウウウ…

風が周りを回っているため、イリアとリアゼは目を開けることなど身動きがとれないのだ。

「…嬢ちゃんには悪いが、それはできねえな。」

「止めたいのは山々だけど…どっちが最善かを考えると、ねえ…」

…エマもシークも動かず、アルフが飛び去って行くのをただ見ているだけだった。

「…っあ…兄貴いい!!」

「アルフー!!」

シュウウウ……

風が完全に止んだ時には、アルフの姿は見えなくなっていた…。

「見つけたぞ、コイン。」

白い翼付きの杖を手にした、神が言った。

アルフは待っていたと言んばかりに、神に近づく。

バサッ
…

バサッ
…

「…手間が省けたな。私を…生贄の神社へ連れて行ってほしい。」

「自分の立場をよく理解しているようで、なかなか感心なコインだな。…こっちだ。」

バサッ
…

神は、東の方向を指さし、飛び始めた。

「
……………」

アルフも付き従うように、飛び立っていった…。

「…ねえ。シークもエマもなんで止めなかったのよ！？アルフが…アルフが生贄にされちゃうんだよ？消滅しちゃうんだよ！？」

イリアは、一気にそこまで言つと、うつつと泣き始めた。

「イリア…。悪かったね…ごめん。でも、彼を救う方法が見つかるまで、こうやって時間を稼ぐしかないんだ。」

エマは、イリアの頭を撫でながら、諭すように言った。

「救う方法…あるんすか！？」

「…一つだけあるが、極めて難しい方法だ。だから、最終手段と思つて、アルフの前では言わなかったんだぜ。」

シークがエマの代わりに答えた。

「ぐすっ…それを早く言つてよね…。」

涙を拭い、恨めしそうにシークを見るイリア。

「へえ…さすがシーク。そこまで考えていたとは、自分にさえ読めなかったよ。」

「ぐ、偶然、文献を見つけたただけなんだがな…。」

エマの賞賛に照れたのか、シークは後頭部を触り目を反らす。

「兄貴を助ける方法…早く教えて下さいっす！」

「おお、そうだな…。『天界戦争と生贄の儀』という文献によると
だ…、確かにコインが生贄になることで戦争を終わらせる方法も
ある。だが…戦争を終わらせる方法はもう一つあるらしい。それは
…」

ゴクッ…

イリア、エマ、リアゼの三人は、固唾を飲んでシークの次の言葉を

待つ。

「それは…… もう一度だけルティーナ・プルリエにレクイエムを歌ってもらおうというものだ。」

「……へっ？」

「えっ……」

「それだけなの？」

意外にも簡単に思える方法に、三人は気拔けした。

しかし、シークは至って深刻そうな険しい表情だ。

「……まず、会うことから難しいんだ。ルティーナがどこにいるか……誰も知らねえし、文献も無いんだからよ……」

リアゼは、まじっすかときょんとしていた。

「じゃあ、まずはルティーナの消息を探さないとダメってことか。」

「でも…時間無いかも…。生贄の儀って、もうすぐ始まっちゃうんでしょ？」

淡々とまとめるエマと、不安げなイリア。

「まあ…もうすぐつつつても、半日はあるんだがな。」

「半日…っすか。なら、こんなゆっくり話してる場合じゃないっす！ルティーナを…手分けして探さないと！」

バサッ…

リアゼは言つと同時に浮き上がる。

「君の言う通り、だね。急ごうか。一分一秒が惜しいからね。」

バサッ…

「少しでも助けられる可能性があるなら…！あたしもやるよ！」

バサッ…

「…おう、急ぐか。」

バサッ…。

4人は大きく翼を広げ…

バサバサバサバサッ！！

四方に散らばり、ルティーナの搜索を開始したのだった…。

「……………」

協会の前の花畑に、天界の予言者ルティーナ・プルリエは座っていた。

考えごとをしているかのように目を伏せ…

頬に風を感じ…

目的があつてそうしているわけでもなく…

しばらくそのままじっとしていた。

時折、なぜ…、と小さく呟きながら…。

集音器に声と共に教会の鐘の音が入っていることに、いち早く気付いたエマ。

これは、先に千爺にアドバイスを求め庵を訪れた時にもらった機械である。

特定の音や声に反応し、発信源を探し出す物だ。

バサッ…

バサッ…

（教会…教会…つと。ここかな…？）

カールデイト市にある教会。

バサッ…

トッ…。

エマは、教会の屋根の上に降り立ち、集音器をゆっくり動かす。

ピピッ……………ピピッ……………ピピッ……………。

集音器は、弱い反応を示した。

（……………違う、か。でも…ルティーナがこの市に存在するのは確かだね。）

バサッ…

バサバサ…！！

次なる教会を探し、エマは飛び立っていった…。

神社の鳥居が、赤黒く不気味に光った。

「…皆、揃ったようだ。今より！生贄の儀を取り行う！生贄を捧げることによって…戦争を終わらせることあらんと！」

シャリ…

天界においての唯一の神社の神主は、高らかに宣言した。

ワアアア…！！

集まった天界の者達が、歓声を上げる。

その中で、神社の右隣にある大木に太い縄でくくりつけられ、顔を伏せている者達がいた。

アルフレッド・フィアラ。

そして…

「再び…巻き込んでしまったようで、すまない…。」

「…気にしないで。私が勝手にやってしまったことの報いなんだから…。アルフは悪くないわ…。」

メルディアン・イーグル。

彼ら二人だった。

「静粛に！それから、コイン同士の会話は慎め！」

眉を吊り上げた恐しい容貌の神が、アルフとメルディをにらんだ。

……。

歓声が止み、辺りがしーんと静まった。

神主は、おほんと一ツ咳払いした。

「まずは…生贄を清めるため聖水を浴びせよ。」

「はっ！」

巫女のような正装をした女性が聖水を手にし、アルフとメルディに近づく。

スッ…スッ…

パシャ！

「…っ…！」

パシャ！

「きゃっ…！」

身動きのできない二人に、正装の女性は容赦なく聖水を浴びせた。

スッ…スッ…

そうして、何食わぬ顔で神社の境内に戻る。

「次に、天界4種族和解の辞を…」

生贄の儀はプログラムにそって、止まることなく執り行われていった…。

「ルティーナさん！居たら返事してよー！！」

イリアのかん高い声が、澄み渡った青色の空に響き渡った。

……。

当たり前であるが、返事は返ってこない。

ただ、ホーホケキョと風流なウグイスの鳴き声が返ってくるだけ。

イリアは、ほんとと参っていた。

（もうっ…これ、不良品じゃないの！？反応ある場所の近くを一時

間も探してるのに…見つからないじゃない…。(

忌々しげに集音器を見る。

ピピッ…

ピピッ…

集音器は、一定のリズムを放ちながら、反応があることを知らせている。

(あー、もう！千爺ちゃんのところまで帰る時間も無いのに…どうしたらいいのよ…んっ？あれは…)

諦めかけたイリアの瞳に、見覚えある人物が移った。

イリアは、視力が良いので、その人物の特徴などがよく見えていた。

黒髪を後ろで束ねた女性と白熱した議論のようなものを交わしている青年…。

（あれって…もしかして…）

バサバサッ…

イリアは、花畑に向かい猛スピードで急降下した。

「だーから！レクイエムをもう一度だけ歌って欲しいんすよ…。
兄貴を助けるためには、あんたの助けが必要なんっす！」

リアゼが必死で説得するにも関わらず、黒髪の女性は歌おうと試みはしなかった。

ただただ、首を傾げ眉を下げ、悲しそうな顔をするだけだった。

とある協会の近くの花畑。

赤や黄色、白や青など色とりどりの花々が、訪れた者を魅了する。

その隣には、日当たりの良い墓場があった。

「本当に頼むっすよ…ルティーナ・プルリエさん。」

すがるような思いで、リアゼはもう一度小声で言った。

すると、先ほどと違いルティーナは口を開け何か呟き始めた。

「わ……み……き……ない……」

「へっ……？今、何て……？」

リアゼは、目を丸くして聞き返す。

「……………」

言葉が伝わらないのが悲しいのか、ルティーナは再び無言でうなだれた。

（わみきない？…全く意味がわからないぜ…）

「はあ……」

「リアゼー……！」

リアゼが困り果ててついたため息とほぼ同時にイリアの声がした。

「ピンク娘…？」

「リアゼー！！やっぱりあんたじゃん」

イリアはもう一度リアゼの名を呼んだ。

バサ…バサ…

スタツ…

リアゼとルティーナの正面にイリアは降り立ち、二人の顔を見比べる。

イリアを見つめるルティーナの瞳は、得体の知れない者に怯えているかのように潤んでいた。

「あれ…？あなた…もしかして…」

「……………」

「ルティーナ…プルリエさん？」

「そうみたいだぜ。」

無言のルティーナに代わり、リアゼが答えた。

「そうなの！？あ、リアゼ…あんた、まさか…」

「な、なんで睨むんだよ？」

「ちょっとこっち来なさい！」

子供を叱る母親のように怒鳴り、イリアはリアゼの腕をグイグイと引っ張る。

「いって！何すんだよ！？」

「いいから！」

ジタバタしながらイリアに連行されていくリアゼを、ルティーナは不思議そうな表情で眺めていた。

イリアは容赦なくリアゼを引っ張り、無理矢理教会の前まで移動させた。

そして、一言。

「あんた、ルティーナ・プルリエを何怖がらせてるのよっ！脅すよんな頼み方したんじゃないの！？」

リアゼの方は、いきなり連行されるわ、文句つけられるわなので少しムツとした。

「必死に頼んだだけだったの！脅してねえし、兄貴のためによって理由まで話したんだぜ？」

「本当に？」

疑いの眼でリアゼを見るイリア。

腕を組んで多少威圧的である。

「本当だぜ！！そんなに、俺に文句言うならピンク娘が行って頼めばいいだろうが。」

「もちろん、そのつもりなんだけど？女同士だし、あんたより上手く説得してみせるから、見てなさいよっ。」

イリアは、挑発するように言うと、スタスタとルティーナの前まで歩いていった。

ルティーナは、やや身を引き、不安そうな表情で、イリアの言葉を待つ。

「ルティーナさん！お願いがあるのっ！あたしの大事な大事なアルフって死神が消滅しちゃうかもしれないの…。ルティーナさんがレクイエムを歌ってくれば、助かるの。だから…歌って！」

「……………」

イリアの身振り手ぶりに反応し、目をパチクリさせるルティーナ。

「あれ…？声出せないのかな…。お願いだから、一回だけ！歌ってよー！」

「……………」

やはり、無言である。

ほら見る、といった表情で、リアゼが歩いて来た。

「女同士だから、とか俺より上手くやる、とか言っときながら、このザマかよ、ピンク娘。」

「う…うるさいなっ！本人の意志で歌わないんだから、あたしが説得下手なわけじゃないもんっ！」

「へえ…そうなのかよ。」

「な、なによ、その目は！あたしを疑ってんの？」

「別にー。大口叩いてこれだから呆れてるだけだぜ？」

「何よ？あーんたの方ができてないくせにっ！」

二人の言い合いは止め止め無く続く。

ルティーナは、中に入りきれず、手を前に出しおろおろしていた。

辺りがシーンと静まった。

プログラムの最後…生贄の捧げが行われるのである。

「…どこの世界においても、レディファーストが重んじられる。…
メルディアン・イーグルよ、前へ。」

シュル…

メルディを縛っていた縄が解かれた。

「…はい。」

自由の身となったのにも関わらず、メルディは素直に返事し、神社の中へと足を進める。

トンッ…

トンッ…

トンッ…

彼女の足音だけが、神社内と辺りに響き渡る。

「では…メルディアン・イーグルよ。コインを故意に逃がした罪でそなたを生贄とする。異存はないな？」

抑揚のない声でそう聞いたのは、その神社の神主。

黒い布で顔をすっぽり隠しているため、表情は窺えない。

メルディは、すうと一つ息を吸い込んだ。

「異存はありませ…」

「いや…異存ありだ。」

不意に彼女の声をかき消した声があった。

そこにいる者全員が、声の方向を睨みつけるような表情で注目する。

「異存あり、だ。」

先ほどと同じ声が、もう一度繰り返した。

神主は、ふんつと鼻で笑い、見下げるような視線を送る。

「コインには、発言の権利はないはずだが？まあ…一応聞こう。異存があるならば、そなたはどうするつもりだ？アルフレッド・フィアラ。」

（アルフ…）

メルディの表情が曇る。

アルフは、大勢の視線を物ともせず、メルディを見返しながら答える。

「…私が先だ。元々コインである私から、先に消滅させるべきだと言っているのだ。」

「アルフ、何を言って…」

「それに…メルディは何も関係ない。私が…彼女を脅し唆したから

だ。」

…ダンッ！

言葉が言い終わるか言い終わらないかわからない内に、机を激しく叩く音がした。

「それは、俺が知っている事実と違うぜ？メルディアンは…確かに自分の意志でその死神を逃がしてたはずだ！俺が証人だからな！」

「静粛に！今はそのようなことは問題ではない。落ち着け、ラッシェ。」

「……………っ。わーったよ…。」

他の神に諭され、口をつぐむラッシェ。

「…どちらにせよ、私から消滅させるのが道理というものだ。」

「ふむ…そなたの意見は、誠に正しい。…係の者よ。メルディアン

を再び縛りおけ。代わりに、フィアラを前に。」

アルフの言を受け、係の者達はせわしなく命令を実行させた。

アルフは神社の中へ上がり、メルディは大木に再び縛られようとしていた。

「アルフレッド・フィアラ…、そなたが言ったのだから今更見苦しい真似などせぬな？」

神主は、アルフに顔を近づけ、からかうように聞いた。

少し離れた場所から、ダメよアルフという声が聞こえてくる。

アルフは、メルディの方をチラッと見て、すぐに神主に視線を移した。

そして、

「…もちろんだ。」

はつきりと答えた。

「それならば、係の者よ、遠慮せず参れ。」

神主の言を受け、灰色の髪的中年男性がアルフに歩み寄る。

手には、大きな鎌。

刃先が妖しくギラギラ光っている。

スッ…

係の男性は、アルフの正面に立ち、鎌を大きく振り上げ…

「アルフー！！！！」

メルディの悲鳴が、辺り一帯にこだました。

「二人とも何してるのさ！」

「エ、エマ…？」

「何って…」

エマの怒気を帯びた声で、イリアとリアゼはハツとした。

バサバサ…

エマは、そんな二人の前ではなく、ルティーナの前に降り立った。

ルティーナは、目を細め怪訝そうに見つめている。

なぜか、怖がったりはしていなかった。

それからエマは、一度振り返り、イリアとリアゼに向けて言う。

「ルティーナに、レクイエムを歌ってもらって、アルフを助ける。違ってたかな？」

その瞳は鋭く、イリアもリアゼも正視できず、うつむいていた。

それに二人には、返す言葉もない。

エマは、今度はルティーナの方を向き直った。

それから、一冊のメモ帳を取り出し、さらさらと何か書いた。

「ルティーナはね……」

ルティーナ・プルリエは紙を見て、悩んでいるかのように目を逸らした。

紙には、『レクイエムを歌ってほしい。自分達の仲間を助けたいから。』と書かれていた。

エマは、ポケットからまた何か取り出した。

そしてそれを、ルティーナの手にそつと載せる。

それは、指輪だった。

ドクロの装飾がされたシルバーのリング……。アルフがシークに預けた物である。

「ルティーナさんは…何？」

イリアが顔を上げぼつりと聞く。

「ルティーナは…話せるけど耳が聞こえないんだよ。」

手に載せられたリングを凝視した後、ルティーナはこくりと頷き、息を大きく吸い込む。

…誰もが聴き入ってしまうような歌声だった。

子守歌のように優しく…温かく…自然な歌声…。

「レクイエム…？」

「レクイエムだ…予言者ルティーナ・プルリエの…」

「もう何年も聴いてなかったのに…」

カランカラン…

係の男性の手から、大鎌が落ちて音を立てた。

神主も…

審判員達も…

神社に居るほとんどの者が、ルティーナの歌声を静かに聴いていた。

天界のあちこちから聴こえていた悲鳴や狂気の声が…

歌にかき消され…

やがて…

全て消えた。

…その中で一つだけ消えない声があった。

「メルディ……………」

消え入るような呟き声。

胸を切られ力なく自分の腕の中に横たわるメルディを見つめるアルフの声。

「ア…ルフ…」

神から無の存在へと、徐々に変わりつつメルディの声。

「それは運命…それは定め…」

レクイエムの中盤に歌声は差し掛かっていた。

だが、アルフの耳にもメルディの耳にもその声は入って来なかった。

「メルディ…なぜ、君は私をそこまで助けようとするのかい…？」

ポタッ…

一滴の水が、メルディの頬にかかった。

メルディは、まだ消え始めていない方の手で、アルフの髪を撫でた。

一回…

二回…

三回…

ゆっくりと…丁寧に…。

「あなたを…寂しそうな…悲しげな…あなたの心を…救いたかったから…よ…」

顔に落ちる水の冷たさを感じ、自らも冷たい水を流しながら、メルディは小さく答えた。

「メルディ…」

「さよならは…言えないわ…。だって…また…きっと…巡り会えるから……………」

言葉を言い終わり安心したのか、メルディはそのまま目を閉じた。

パアッ…という穏やかな光を放ちながら、まるで砂でできた人形のように、メルディの体は消えていった…。

ポタッ…

メルディの体を抱いていた腕は、温もりではなく冷たさを感じていた。

大木や神社のある辺りから、もう帰っていいぞ生贄の必要はなくなったからな、という声が飛んできた。

けれど、まるで全く聴こえてないかのように、アルフはその場に座り込んだままだった…………。

「安らぎに包まれ…眠れ……………」

…レクイエムを歌いきり、満足げな笑顔を浮かべているルティーナ。

エマは、安心して気が抜けたのか、ふうと深いため息をついた。

イリアとリアゼは、不思議そうに顔を見合わせていた。

「エマ…なんでルティーナさんが耳が聴こえないって、わかったんだろう?」

「俺に聞かれてもわからねえよ…。本人に聞いてみりゃいいだろ。」

「さあ、なぜだろね?当ててみたら?」

「わっ!?!エ、エマ…」

はるか前方に居たはずのエマが、突然背後に現れ、驚くイリア。

エマの後方から、ゆっくりとこちらに歩いてくるルティーナの姿が見える。

「確か…ルティーナ・プルリエに関する文献は無かったよな…。と
いうことは…関係者ってことかよ?」

「なかなかいい線いってるね、リアゼ君。」

エマが、ニコリと笑って誉めた。

「関係者…？家族、か…友達か…親戚とかって…？」

ルティーナが三人の所までたどり着き、目をパチパチとしばたいている。

「まあ、そういうことだよ。」

「そういうことって…結局何なのっ？」

「今はそんなことより、アルフの無事を確認した方がいいんじゃないかな？儀式に間に合わなかった可能性もあるから…」

エマが険しい表情で言って、

「えっ！そうしたら、アルフ…。急いでアルフのここに行かなきゃ！！」

ようやく、事の重大さを理解したイリア。

「俺も行くぜ！」

バサッと、リアゼが翼を広げる。

「リアゼ、あんたも着いてくるのー！？」

アルフとラブラブな感動の再会をしようと思ったのに…と、口を尖らせ不満げなイリア。

「別にピンク娘に着いていくわけじゃねえっつもの！ただ兄貴が心配なだけだぜ…」

「あっ、そう。じゃ、おしゃべりしないで早く行くよ！」

「お、おう…?」

ケンカ腰な返答ではなかったので、リアゼは若干拍子抜けしてしまった。

ルティーナは、イリアとリアゼの掛け合いを見て、クスクスと笑っていた。

それから、死神の三人は、

「ルティーナさん、ありがとうね!」

「サンキュな!」

「ありがとう。」

各々、ルティーナに礼を言って、天界へと飛び立っていった…。

（本当にありがとう…姉さん。）

他の二人と違い、エマはそう心の中で呟きながら…。

パシッ！

鎌を持つアルフの右手をシークがつかんだ。

大鎌の刃は、アルフの左胸部2ミリ前で止まっている。

周りにいる者達は、一体何事か、とザワついている。

「…止めるな、シーク。」

顔を伏せたままで、アルフが言った。

声には怒りとも悲しみともつかない感情が混じっている。

「いや、止めるに決まってるだろうが…こんな馬鹿な真似はな!」

パシーン!!

強い口調で言って、シークはアルフの手から鎌を弾き飛ばす。

眉をひそめ、これまで誰も見たことないほど、彼は怒っていた。

その声は、その場に居た全員にゾクツという寒気を与えたほどだ。

「馬鹿な真似、か…。どうとられても構わないさ…」

「ふざけるな…。あんたが消えたって…消えた存在の者が戻ってく

るわけじゃないだろうが!!」

「そのくらいはわかっている…。」

アルフは、やや投げやりに答え、面をゆっくりと上げた。

「私が居なければ…私が居なければ消えることなかったのだよ…メルディもカナルも…」

そう呟くように言って、アルフは再び目を伏せた。

「…だが、あんたが居なければ存在できていない者も居る。」

「…そんな者は居ないさ。」

「いや、居る。」

ポンッ…

シークの手が、アルフの肩を優しく叩く。

「俺が知らないとも思ってたのか、アルフ。あんたは…人間の子供の命を助けていた。違うか？」

「……………」

「病院で手術を拒んでいた少女…死神になりたいから死にたいと言っていた少年…交通事故でその日が峠と言われていた幼児…。全部あんたが助けていた。俺はこの目で見てきたからな…。」

アルフは、そうかと小さく答えた。

顔は伏せたまま。

「身近な奴でいやあ、イ…」

「アルフ！大丈夫！？」

「兄貴ー！」

「あれ？シークも居たんだ？」

「…ちょうどいいタイミングだな。」

不敵ににやつと笑うシーク。

話を遮ったイリア、それからリアゼとエマは、二人の前にゆっくりと降り立つ。

バサッ…

バサッ…

スタッ…。

アルフは相変わらず顔を上げなかった。

「兄貴！間に合ったみたいっすね…本当、良かったっす…」

リアゼは、ほっと一安心したようで、和やかな笑顔である。

「良かった…アルフが生贄にならなくて良かったよ…」

イリアは、ぐすつと少し泣き顔。

「…良かった、か。」

アルフは、ちっとも良くないというかのように、乱暴に言葉を吐いた。

しかし、最小の声だったので幸い誰も聞き取れなかったようだ。

「俺が居たら不都合か、エマ。」

「いや…急に居なくなったのに、おいしい役とってることにし納得いかないかな。」

怪訝そうなシークに対し、皮肉気に答えるエマ。

シークは、うつ…と小さく言って返答に詰まった。

「ま、まあ、それはいいだろうが。それより…嬢ちゃん。」

「ん？あたし？」

シークの視線が、自分にあることを完治し、自分に人差し指を向けるイリア。

「リアゼもエマも聞いてほしいが、嬢ちゃんに一番聞いて、何らかの言葉が欲しい。…アルフがな、自分を責めちまって、自分が消えればいいとまで思いつめてる。」

「え！？なんで…アルフは何も悪くないのに…」

イリアは、少し眉を下げ悲しそうな顔でアルフに視線を送る。

それに気づきながらも、アルフは特に何の反応も示さない。

「兄貴…自分を責めたらダメっすよ！弟のことを悔やんでいるなら、それは兄貴のせいじゃ…」

「二人だ。いや…本当はそれ以上なのかもしれない…」

リアゼの言葉を遮り、アルフが言った。

エマは、なんだそれと言いたげな妙な表情で成り行きを見守っている。

「何が二人なの、アルフ？」

尋ねながら、イリアはアルフの隣にちょこんと座った。

妹か弟を心配する姉であるかのように、心配そうに顔を覗き込みながら。

アルフは至極重たそうにゆっくりと頭を上げ、何も映さないような空虚な瞳でイリアを見つめる。

それから、小さく口を開けぽつりと言った。

「…私の犠牲となった者の数だよ、イリア。カナルに…メルディ。」

「えっ…メルディは消えちゃったの…？」

「その言い方だと、君をかばって消滅してしまったんだね。」

面食らうイリアと、冷静に読み取るエマ。

シークとリアゼは特に何も言わず、会話を聞いている。

「…その通りさ。私をかばって…あの鎌に切られた…。」

「……………だから、自分を責めてるというのか。大事な人を助けられ

なかった自分自身を……。それなら、筋違いもいいところだね。」

「筋違い……だと……？」

アルフは、眉をひそめエマの方をにらむ。

「誰にもわからないさ……私の悲しみを……痛みを……。私さえ居なければ……何も起こらなかつ……」

「アルフ！」

「……………！？」

一瞬にして言葉が継げなくなった。

イリアがアルフをぎゅっと抱きしめていたからである。

「ピンク娘……」

「おっと…まあ、黙って見てようや…」

何か言いかけ歩み寄ろうとしたリアゼを、シークが手で制止する。

「……………」

「アルフが居なかったら、あたしはあの時、ただ死んでただけだった…。」

「イリア…?」

「レリックの時だってそうだよ…。アルフが居なかったら、あの子は助かってなくて…きっと後悔してたよ…」

イリアは、いつものニコニコ顔の彼女と違い、キツと鋭い表情をした。

「だーから！自分のせいで、大切な人の存在を消したとか、ネガティブなことは考えちゃダメだよっ！ポジティブに考えようよ、アルフ？救った命だってあるんだから…。」

「救った命…か。そうだな…、わざわざ今消えなくても私は…」

「えっ？」

「…いや、何でもない。犠牲によって生かされた命…全うすることがカナルやメルディへの手向けかもしれないな。」

アルフは、穏やかな笑顔をイリアに向け、イリアの腕を優しく抱った。

「アルフ…」

「心配しなくても私は大丈夫だ、イリア。…もう二度と自分の存在を否定しないからな。」

「…アルフ。あんたの背負う悲しみは、確かに誰にもわからねえ。だがよ、あんた一人だけが苦しむとは考えるなよ？死神になった奴あ、大抵そういった苦しみや後悔を抱いているんだからな。」

「そうっすよ、兄貴…。メルディを助けられなかったのは、レクイ

エムを間に合わせられなかった俺達にも責任あるってことになるんすから。兄貴が罪を背負うんだったら、俺達も一緒に背負うっす！」

リアゼは、片目ウィンクしてぐつと親指を突き出した。

「…シーク、リアゼ、イリア、エマ。皆…ありがとう。私は、一人ではないのだな…こんなに良き仲間を持っている。だから…悩む必要も無いのだな。」

「うん、そうだよ、アルフっ！アルフの悲しみとか悩むとかは、あたし達も一緒に背負うからねっ！」

そう言って、とびっきりの笑顔をアルフに向けるイリア。

つられて、アルフの顔にも微笑みが浮かぶ。

シークもリアゼも、ほっとしたかのように苦笑いで顔を見合わせていた。

…辺りには、いつの間にか彼ら5人以外は誰も居なくなっていた。

しかし、彼らにはそんなことは関係なかった。

ただひたすらに…アルフの無事と心の復活を喜んでいたから。

（大丈夫だ…もう大丈夫だ…）

アルフは自分に言い聞かせるかのように、二度心の中で呟いた。

その時にほんの一瞬だけ見せた悲しげな表情は、エマだけが気付いていたが、彼女は何も言わず、時は過ぎていくのだった…。

「私が助けられる命は、あんたで最後だな…。」

アルフは目の前の少年に向かって、しみじみと言った。

「えっ…？」

少年は不思議そうに首を傾げた。

見た目から判断するに、年齢は8歳ぐらいだろうか。

赤みがかかった茶色い髪は、無造作にはねている。

「誰…？どういう意味？」

「…私は死神アルフ。人を助け、人に助けられ、生きてきた死神だよ…。」

「死神？」

「そう…死神だ。」

トンシ…

「あっ……………」

ドサッ！

アルフに額を押されると、催眠術にかかったかのように少年の体は地面に倒れた。

「この鎌とも、長い付き合いになったな…。ありがとう…と言いた
いものだ。」

アルフはぼつりと眩き、愛用の鎌をしばし見つめた。

夏の太陽に照らされ、鎌の刃がぎらりと光る。

人がほとんど通らない田舎道。

風に揺れるひまわり畑。

穏やかな日差し。

空をゆるりと流れる白い雲。

二度と見れない景色達だ…。

アルフは、しっかりと景色を目に焼き付け、決心したかのように空を見上げる。

そして、

「時は過ぎ去り…絆は脆く崩れる…」

歌い始めた。

自らに贈るレクイエムを……………。

決してルティーナのように上手くはないけれど、心のこもった悲しい歌声…。

走馬灯のように、死神として過ごした日々が思い起こされる…。

（イリア…）

『あたしもアルフと結婚したいなあ…。』

（リアゼ…）

『兄貴、戦争って…何のためにやるんすか…？』

（シーク…）

『あんたも可哀想な奴だよな、アルフ。』

（エマ…）

『…筋違いもいいところだね。』

（カナル…）

『鎌を預ける意味…わかってるよな？』

（メルディ…）

『今でもあなたを愛してるわ…。』

（千爺…）

『良いか、アルフ。己が信ずる道を進むのじゃぞ？それがどんなに辛い道であっても…』

歌声が消えた時…、アルフの姿はもうそこには無かった。

たった一枚…

鳥の羽根とは到底思えないような、黒く大きな羽根が落ちていただけだった。

そしてその羽根の近くに…

少年が一人、倒れているだけだった……………。

イリアは、誰かに呼ばれたような気がして、不意に振り返った。

「イリア…どうかした？」

「えっ？」

「泣いてるよ…。」

「あ、あれっ…？なんで、あたし泣いてるの…？」

イリア自身も気付いていなかったようだ。

エマに指摘され、慌てて手で涙を拭う。

「何か悲しいことあった？恋人の自分に話してごらんよ。」

「何言ってるの、エマ…。あたし、そういう趣味は無いし…。それに、あたしの好きな人はっ！あたしの好きな人は…あれっ？」

「どうしたのさ？」

エマに聞かれても、きょんとして数秒固まるイリア。

「イリアの好きな人は…誰？」

「おかしいよ…思い出せないの。名前も…顔も…声も…全部。」

「そもそも、イリアに好きな人なんか居た？自分、聞いたことないんだけど…」

「居なかった…っけ…？」

エマは、さあ知らないと言つように、首を振るだけだった…。

「千爺さん！聞きたいことあるんすけど…」

ドタドタと駆け足で庵に駆け込んできたのはリアゼ。

急いできたのか、息は荒く額から汗が滲んでいる。

「リアゼじゃねえか。もしかして、俺と同じこと聞きに来たのか？」

「シーク…」

まったりとお茶をすする千爺の隣には、正座して千爺に対峙するシークの姿があった。

「そう…俺達は、大切な何かを忘れてるんじゃないか、って。」

「……………そうっす。」

千爺は、それには答えず、

「騒がしい日じゃのう…」

と、呟いていた。

閻魔は、仕事の手を休め、マグマから上がってきていた。

「これで本当に良いのか、アルフレッド・フィアラ。」

「もちろんだ…。」

閻魔の前には、今にも消えそうなほど体が透き通ったアルフの姿があった。

「わしは、興味が無いからどうでも良いのじゃがのう。後で文句を言われたら、うるさいから一応問うてみた。」

「…文句も愚痴も言わない。それは約束しよう。」

「では、行くか…無の世界へ。」

閻魔は前に立ち歩き始めた。

アルフはもう何も言わず、ただ閻魔の後を着いて歩く。

無の世界では、自分という存在がわからなくなってしまつと知らないが…

それはあらゆる意味での“死”であると知りながら…

それでも彼はそこに向かう。

全てを終わらせるために…

全てを始めるために………

白い光が見えてきた。

それは、辺りを凄まじいスピードで包み…

そして………

ひまわりの花畑の前に、一人の少年が立っていた。

茶色い髪、整ったハンサムな顔立ちの少年…。

年の頃は、十代前半といったところか。

悲しげな、それでいて少し嬉しそうな複雑な表情を浮かべ、ひまわりを見つめている。

その隣には、これまた整った顔立ちの美しい女性が立っていた。

「ねえ、母さん？」

少年が言った。

女性は、ふんわりとした笑顔を少年に向け、なあに？と聞き返す。

「母さんは…ひまわりは好き？」

「好きよ…ここのひまわりは特に。とても温かく、優しい感情を思い起こさせてくれるから…。そう言うカナルは？」

“カナル”と呼ばれた少年は、少し考えてから答えた。

「好きだよ…きれいだから。そうだ！このひまわり畑に名前を付けようよ！母さんと同じ…“メルディ”って名前を！」

「ひまわり畑に名前を…？おかしな子ね。」

“メルデイ”と呼ばれた母親は、苦笑いしながら返す。

ひまわり達も笑っているかのように、風に流され微かに揺れた。

『時は早く過ぎ去り…』

『絆は…脆く崩れる…』

『戦いの果てにあるのは…』

『喜びか…悲しみか…』

『また一つ…存在が消える…』

『それは運命…』

『それは定め…』

『抗えない…絶対の物…』

『今はただ…』

『安らぎに包まれ…眠れ………』

彼らの戦いと生き様は…

永遠にあなたの胸に…

I e n d I

レクイエム（後編）（後書き）

前回のあとがきで最終話と言いましたが、もう一話あります。

まあ、話というか設定資料などなので、読みたい方だけ読んでくださいな（・ω・）

また、2が出るからもしれせんし。

設定資料集（前書き）

これは、設定資料等です。
興味のある方はお読み下さいませ。

設定資料集

【死神分析記録1】

死神の鎌は全て同じではなく、個人に応じた能力が付けられる。

また、他の死神から鎌を受けることは、その死神の意志を継ぎ、鎌の能力を得ることになる。

【死神分析記録2】

神力とは、死神個人個人の力であり、これが高い死神ほど、戦いにおいて優位である。

ただし、相手の神力を一瞬でも上回ることができれば、普段神力が負けている場合でも勝てることもある。

最高神力者：アルフの祖父、千爺。

【死神分析記録3】

死神黙約とは、死神の中の暗黙の規則を定めた書である。

全ての死神は、この書を一読してから仕事を始めなければならない。

また、規則は絶対であり、破り続けた者には、その存在が消滅という厳しい罰が与えられる。

第50条以降は、空白が続いていることから、誰かが規則を増やしていることが予測される。

果たして…その“誰か”とは、誰なのか…？【死神分析記録4】

・レクイエム

レクイエムの創設者は、ルティーナの恋人のファイド・クリックという青年死神である。

彼は、死神としての命を、子供の命を救うために使っていた。

そして、自分の存在と引き換えに、アルフを救った。

レクイエムは天界の者ならば誰でも知っているが、歌い手は死神が多い。

消え行く者に贈る歌である。

・コイン

アルフは、自分が“コイン”であることを知っていた。

コインとは、正当なる生贄のことでアルフの一家、フィアラ家の人間は全てそうだった。

フィアラ家の人間が早死にする理由は、それである。

アルフはそれを知るために死神になったのだ。

カナルは、直接的な生贄にはなっていないが、アルフの力を増幅させた意味では“生贄”になるのかもしれない。

・無の世界

本当に何も無い、周りが白い世界。

ここに来た者は、自分が何者かわからい内に存在を“無”に飲み込まれてしまうのだ。

掟を破りし者の処刑場のような場所である。

【主要人物プロフィール】

アルフレッド・フィアラ

フィアラ家の長男にして、過酷な運命を背負いし青年。カナルという弟がいて、メルディという彼女がいた。冷静で、語るような口調。落ち込みやすい。

17歳。強盗事件に巻き込まれ、彼女の前で撃たれた。

イリア・ザルメス

14歳。元氣いっぱい、残酷なことをしても、全く悔いなく楽しむ。アルフに惚れて死神になることを決意。リアゼとは犬猿の中。

リアゼク・ギルド

15歳。アルフを憎んでいたが、和解し兄貴と慕う。

すぐ熱くなり、アルフ以外に対しては毒舌。
イリアとは犬猿の中。
読者家だったらしい…。

シーク・ルスタリイ

推定年齢、25歳。

アルフの兄的存在で、博識、冷静、渋い。
赤髪、黄色い瞳。千爺と仲良し？

カナル・フィアラ

アルフの弟。多重人格であり、そのためアルフに消された。マイペース、明るい性格。
13歳。アルフより先に死んでいる。

メルディアン・イーグル

メルディと呼ばれ、人間界でアルフの彼女だった。
アルフに命を奪われたが、笑顔でいた。優しく聡明な女性。17歳。

エマ・プルリエ

イリアの親友であり、ルティーナの妹であり、シークの恋人(?)
22歳。さっぱりした性格で、淡々とした口調。何か秘密があるらしいが…？

ルティーナ・プルリエ

レクイエム創設者の恋人。天界人であるが、下界で暮らしている。
26歳。難聴である。

セン・フィアラ
千爺

アルフの祖父で、天界の最高権力者。推定年齢73歳。全ての秘密を知る人物。

設定資料集（後書き）

なんとなく思いついて軽い気持ちで書いた小説が、皆様に愛されているようで、作者冥利につきます。

連載初めて早2ヶ月近く…。

誰か、この小説を映画か漫画にしてくれないかな…なんて、夢想する今日この頃。

死神のお仕事2は、リクエストと作者のやる気自体で描くかも。

ちなみに、この作品はとある所に応募予定です（・ω・）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7409f/>

死神のお仕事

2010年10月9日01時16分発行